

図書複写申込書

No. 1390

国立国会図書館長殿

右のとおり申し込みます。

韓国独立記念館

氏名又は
機関名・責任者名

李 健



昭和60年

12月20日

職

韓国独立記念館

(学生は学校名) 日本地域資料蒐集委

〒108

住所又は所在地

港区白金台3-18-8-102

電話

(447) 1400

申込上の注意

1. 複写は、国立国会図書館の収集した図書について、一人一件につき一種類を一部とします。
2. 複写は、調査研究の用に供するため図書の一部分(発行後相当期間を経過した逐次刊行物に掲載された個々の論文等)にあっては、その全部)の複製物を入手しようとする場合に限りします。
3. 図書館等のための複写、裁判手続等のための複写、著作権者の許諾による複写等については、この申込書のほか特別複写許可願を提出して下さい。
4. 複製物は、この申込書に記載した使用目的以外に使用してはなりません。目的外使用により著作権法上の問題が生じた場合は、申込者がその責任を負うことになります。
5. ※印をした複製物については、国立国会図書館が指定した者に料金を支払って下さい。
6. 国立国会図書館は、業務の遂行上又はその他の理由により支障があると認めたときは、複写の申込に応じない場合があります。

複製物の使用目的		韓国独立記念館に於ける研究展示資料			
請求記号	著(編・訳)者名				
大山家	論文名(原文)	朝鮮=於ケル東学党動乱ノ状況			
6-4	誌(書) 名				
3	巻 号(通号)	年	月	頁	計 頁
請求記号	著(編・訳)者名				
大山家	論文名(原文)	朝鮮事件費予算			
6-5	誌(書) 名				
	巻 号(通号)	年	月	頁	計 頁
請求記号	著(編・訳)者名				
大山家	論文名(原文)	朝鮮覚書			
6-6	誌(書) 名				
	巻 号(通号)	年	月	頁	計 頁
複製物の種類	<input checked="" type="checkbox"/> 撮影によるマイクロフィルム <input type="checkbox"/> 焼付によるマイクロフィルム <input type="checkbox"/> マイクロフィルムからの引伸印画		※ <input type="checkbox"/> 電子式複写による印画 ※ <input type="checkbox"/> マイクロフィッシュからの電子式引伸印画		
	<input type="checkbox"/> A5 <input type="checkbox"/> A4 <input type="checkbox"/> 電子式(B4) 日本マイクロ写真				
備考	憲政資料室				

名称	大山 巖文書
標題	朝鮮に於ける東学党動乱の状況 外相宛 明治廿六年四月十五日。

分類 番号	
	6-3

登録 番号	
----------	--

明治六年八月十四日

接到

東學堂に勢次第に増進
らんカ為メ朝鮮官民共に
頗る不安の極あり而し
一軍に際し我臣民保護
一為メ軍艦に仁川に派去
之并に待等自衛ノ用ニ
供らん為メ小銃百挺ヲ送
ラレタシ

二艘ノ支那軍艦數日
お、本岩セリ

上ノ如く述しと云は目下も
甚しノ危之ハマラサレテ
口永おアリタシ

以是定其無以爲人城
乃んカ爲メ朝鮮官民共ニ
願ん不_レあノ從_レ横アリ不_レ時
ノ事ニ際シ我臣民保護
ノ爲メ軍艦ヲ仁川ニ派去
シ并ニ待等自衛ノ用ニ
供_レん爲メ小銃百挺ヲ送
ラシメシ

二被ノ支那軍艦數日
あ_レ本岩セリ

上ノ如ク述ビト云_レ氏目下モ
甚シノ危_レ急ニハアラスヤ
口永おアリタシ

大石公使

新智大臣

名 称	大 山 巖 文 書
標 題	朝鮮事件費豫算 明治廿七年八月

分 類 番 号	
	6-(5)

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

記

金檢五萬圓

流取度貸

一萬八千圓

糧食費

一萬六千圓

被服費

一萬七千圓

軍用被褥軍用輪
車召募費人役平
旅費三千元拂拭費

一萬四千元

砲兵吉田費用

一萬三千八百五拾圓

之方
山溪買上代

一萬三千元

工部局費用

一萬三千元

病費

一萬三千元

軍隊宿衛費
費

計金六拾四萬圓

今般如昭事作一月

九月廿五日

名 称	大 山 巖 文 書
標 題	朝鮮 覽 書 明治廿八年六月廿日.

分 類 番 号	
	6-1(8)

登 録 番 号	
------------------	--

国 立 国 会 図 書 館

二十八年六月三十日

大山元帥御真筆

廿七年朝鮮事件関スル覺書

一
A
6
6

朝鮮政府ハ同玉ノ内乱既ニ鎮定
ニタリ旨ヲ公然同国駐劄ノ各国使
臣ニ告ケ又清国英日本兵ヲ撤回セ
シムルコトニ付使臣ホノ援助ヲ請ヘリ
因テ本官ノ君主タル皇帝陛下ノ
政府ハ本官ニ命ジ日本帝國政府
ニ向テ朝鮮ノ請求ヲ容レラレニコ
トヲ勸告シ且ツ日本カ清国政府ト
同時ニ在朝鮮ノ兵ヲ撤回スルコト

陸軍省

ニ付故障ヲ加ヘラリハニ於テハ重
大ナル責ニ任スヘキコトヲ忠告致シ
前陳ノ事ヲ外務大臣閣下ニ申
通スルト共ニ重テ茲ニお意ヲ表ス
露曆千八百九十四年六月三十
日

名 称	大 山 巖 文 書
標 題	朝鮮東學党事件(封筒と毛六通).

分 類 番 号	
	6-20上

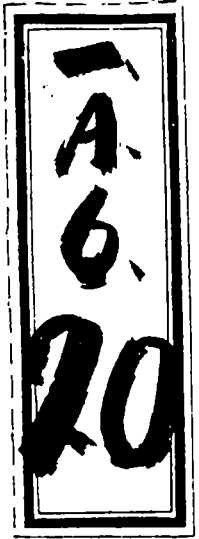
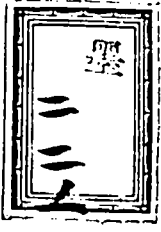
国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

明治廿七年

六月二日

朝録東學堂了休



朝鮮ハ乱民内ニ起リ京城駐在公使館ヨリノ来電ニ據ルニ吾兵頻ニ乱民益猖厥リ窮ムルノ勢アリト云得未乱民京城又ニ其他ノ日本人居ル地ニ侵入スルコト無キヲ保チ難シシテ公使館及吾民ヲ保護スル為メ兵負テ派セラルノ必要アリ天津條約亦三款ニ依ルニ朝鮮ハ變乱又ハ重大事件アルニ當リ日支兩國又ハ一國兵ヲ派スルトキハ行文知照スヘシトノ明文アリ故ニ出兵ニ當リ得未或ハ清國ト往復關係スヘキノ時接ヲ生スル

モ料ルヘカラスト雖今般ノ事ハ急速ノ事變ニ係リ我兵ヲ以テ我カ國民ヲ保護スルヲ急ムヘカラサルカ為メニ清國ト聯合派兵スルヲ待タズ條約ノ明文ニ從ヒ行文知照シ直ニ出兵スルヲ急ムトス

京城駐在公使館杉村書記官ヨリノ来電ニ依レハ朝鮮政府ハ已ニ應援ヲ清國ニ求メタリト云ヘリ清國ノ之ニ應ムタルヤ否ヤハ未タ報知ヲ得ズト雖得未清國モ其ノ兵負テ派セシ兩國ノ軍隊或ハ聯合ノ働ヲ為ス或ハ朝鮮政府ノ要求ニ由リ應援ニ

應援防護スルノ必要ヲ生ズルモ所料
ルヘカウズル此レ亦豫メ算畫ノ中ニ置カ
ザルヘカウズ
今ハ更ニ詳報ヲ得ルヲ待タズ先ツ亦
一ニ公使館及国民ヲ保護スルノ必要
ヲ主トシ接先ニ後レガナル為メニ及フ
タケ速ニ出兵ノ準備ヲ為スヘシ

明治三十七年六月二日

六月一日

第一信

京城ヨリ出陣ノ官軍ハ長城近傍
ニ移テ痛クチク破レタリ乱民ハ全州
ノ外郭迄進ミ来シリ平壤ノ軍兵
ニ援兵ト云テ進日出陣スヘシ

日日

第二信

全州ハ昨日賊軍ノ手ニ落チタリ袁
世凱ト朝鮮政府ト清国ニ援兵ヲ
乞ヘリト云ヘリ

六月三日京城発

平壤ノ兵ハ百五十人及京城ノ兵ハ百
九十人昨日南ニ向テ当地ヲ発セリ

陸奥

板村

朝鮮國駐在公使館
意見書

第三四

朝鮮國乱民内、起り京城駐在
公使館ヨリノ來電ニ據ルニ官兵款
ニ以テ乱民益猖厥ヲ窮ムルノ幣
アリト云將ニ乱民京城又ニ其他
日本人居住地ニ侵入スルコト無キヲ
保チ難ク從テ公使館及國民ヲ
保護スル爲メ兵員ヲ派遣スルノ
必要アリ

天津條約第三款ニ依ルニ朝鮮國
番乱又ハ重大事件ナルニ當リ日支兩

内閣

國又ハ一國兵ヲ派スルトキハ行文知照
スルコトノ明文アリ故ニ出兵ニ當リ將
來或ハ清國ト往復關係スヘキノ時
機ヲ生ズルモ料ルヘカラスト雖今
度ノ事ハ急遽ノ事變ニ係リ我
兵ヲ以テ我カ國民ヲ保護スルヲ急
ルヘカラザルカ爲メ清國ト聯合派兵
スルヲ待タズ條約ノ明文ニ依リ行文
知照シ直チニ出兵スルヲ適當トス

○ 京城駐在公使館松村書記官

ヨリノ来電ニ依シハ朝鮮政府ハ
己ニ意持ツ所ニ依テ之ニ依リト云
フリテ其ノ之ニ應ニタルヤ否ハ
未タ判ナラザル所ト云々將來法
モ其ノ無キヲ以テ其ノ面ニ軍
隊或ハ聯合ノ御ヲ為シ或ハ朝
鮮以テ存ノ要求ニ由リ隨テ之
後防衛スルノ必要ヲ生スルモ亦料
ル所ナラズ世ニ亦豫メ算畫ノ中
ニ置カザル一カラス

今ハ更ニ詳報ヲ得ルヲ待タズ先
チニ公使館及國民ヲ保護スル
ノ必要ヲ主トシテ我先ニ後レガ
為ニ及フタケ速ニ出兵ノ準備ヲ
為スヘシ

明治七年六月二日

更ニ聞リトコロニ因レハ直隸提督葉
及ニ總兵聶爾雅指揮スル三營ハ六月
六日朝大沽ヨリ出兵セラルベシトナフ

六月五日発

天津

荒川

東京

陸奥

名 称	大 山 巖 文 書
標 題	朝鮮出兵意見書 明治廿七年六月二日

分 類 番 号	
	48-51

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

朝鮮國亂民内ニ起リ京城雖在公使館
ヨリノ來電ニ據ルニ官兵頻ニ敗レ亂民益猖
厥ヲ窮ムルノ勢アリト云將來亂民京城又
ハ其他ノ日本人居住地ニ侵入スルコト無キ
ヲ保チ難ク從テ公使館及國民ヲ保護
スル為メ兵員ヲ派遣スルノ必要アリ

天津條約第三款ニ依ルニ朝鮮國變亂
又ハ重大事件アルニ當リ日支兩國又ハ一
國兵ヲ派スルトリキハ行文知照スヘミト有
アリ故ニ出兵ニ當リ將來武ハ清國ト往
復關係スヘキノ時機ヲ生スルモ料ルヘカラスト
名今及ノ事ハ急遽ノ事變ニ係リ我兵

ヲ以テ我カ國民ヲ保護スルヲ怠ルヘカラザルカ
為ニ清國ト聯合派兵スルヲ待タズ條約ノ
昭々ニ從ヒ行文知照シ直チニ出兵スルヲ
適當トス

京城駐在公使館松村書記友ヨリノ
來電ニ依リハ朝鮮政府ハ已ニ應援ヲ
請ふニ求メタリト云ヘリ是レ吾國ノ之ニ應ミ
タルヤ否ヤハ未タ報知ヲ得ズト雖將來
清國モ其ノ兵負ヲ派遣シ西國ノ軍隊或
ハ聯合ノ勸ヲ考メ或ハ朝鮮政府ノ要
求ニ由リ臨接ニ應援防衛スルノ必要ヲ
生スルモ亦料ルヘカラズ此レ亦豫メ籌畫ノ

中ニ置カザル一カラズ

今ハ更ニ祥報ヲ得ルヲ待タズ先ツ亦ニ
公使館及國民ヲ保シ候スルノ必要ヲ主
トシ棧先ニ後レザル為ニ及フダケ速ニ出
兵ノ準備ヲ為スヘシ

明治二十七年六月二日

陸軍大臣 大隈 重信

名 称	大 山 巖 文 書
標 題	朝 鮮 出 兵 の 件 明治二十七年六月十六日

分 類 番 号	
	48-84

登 録 番 号	
------------------	--

外此以聞

西即

唯今為我

從長寬殿下台

通報方

口以佐令

金山、孤遣

隊方商分出兵

以交又、仁川

大隊派出

山何

大隊派出如前
如何以都令之
子民仁川之
尚士大島次將
川率之三大隊
所餘之數
市中為安
時所派出
子方年
方年
方年

自...
...

既...
...

子...
...

既...
...

左...
...

王...
...

...

...

...

名 称	大 山 巖 文 書
標 題	関 妃 事 件 報 告 十 七 通 一 綴 明 治 廿 八 年 八 月 十 三 日 明 治 廿 八 年 十 月 廿 四 日

分 類 番 号	F. VI
	4867 (29)
	3

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

明治二十八年八月十二日午前十一時五十分發同日午後八時着

本月十日夜安駟壽軍部大臣ニ沈相薫、度支大臣ニ李允用、警務使ニ李聖烈ハ内閣總書ニ權在衡ハ軍部協弁ニ李鼎煥、度支協弁ニ任セラレ魚允仲ハ中樞院副議長ニ申箕善ハ同一等議官ニ轉シタリ十二日中ニ金宏集ハ總理大臣ニ任セラルヘシ

右交送ニ付テハ本官ハ大君主ヨリ内密相談ヲ受ケ漸ク前述ノ通り決定シタルモノニシテ何人ニモ相談セサレハ發表ノ當日迄ハ金ク外ニ漏レス隨テ毫モ民心ヲ騷カスコトナク極メテ圓滑ニ行ハレタリ今度ノ交送ニ依リテ宮中ト内閣トノ折合整ヒ暫ラウ無事ヲ保ツヘキ見込ナリ

西園寺大臣

井上公使

秘

十月三日

午後十時四十分京城發
全 十一時二十八分 着

各大臣、警務使、大隊長等ハ事變後率テ王宮ニ詣リ、
曩キ報セシ大院君ノ自訴ハ未タ實行サレス大臣等ノ説ニ露
國公使館ニ逃ケ込ミアル旧侍衛隊ノ大隊長ハ目下朝鮮ノ壯
士ヲ集メ彼等ノチヨリ國王ニ露國公使館ニ行幸アレト勸メシ
密書ヲ送り國王ハ宜ク頼ムトノ返書ヲ與ヘタリ某官宜此事
宜シカラスト諫メシニ忽チ免職セラレタリト
親衛ノ大隊長我士官ニ竊カニ依頼シテ云ク前項ノ如キ次第ナレ
ハ何時宮中ニ事變アルモ計レス日本兵ヲ以テガイト、(談徒の)守
備シ呉レマシキヤトノ事ナリ小官守備大隊ニ戒メテ云ク露國水
兵王城ニ至リ國王ヲ露國公使館ニ導クモ我兵ノ関スル所ニ非ズ

決メ之ニ對シ一兵モ動カスヲ許サスト小官ノ決心ハ此等ノ事件アルモ
斷シテ兵ト兵トノ關係ヲ避ケル積リナリ

田村中佐

川上中將

極秘

今朝五時大院君ハ君側ノ奸ヲ除クト稱ヘ訓練隊ニ
大隊ヲ率キテ王宮ニ入り些少ノ抗抵ノ後君側ニ至レ
リ時ニ五時五十分又三浦公使ハ六時五十分ニ王闕ニ入レ
リ訓練隊長洪啓薰ハ戦死セリト云フ後ハ後刺
ニ

八日午前八時五十分京城発

楠瀬少佐

大本營

參謀總長

電信 十月八日午前十一時十二分京城発

今日午前三時頃訓練第二大隊兵営ヲ脱シテ孔德里

大院君
居所

地ニ到リ大院君ヲ奉シテ王城ニ迫リハ時侍衛隊ヨリ聊カ抵抗ヲ爲セシ

モ直チニ押シ破リテ大内ニ入りタリ是ヨリ先キ訓練亦三大隊兵ヲ配布

シテツキミウヲ警備セシモノ如シハ騷擾之際ニ我守備隊ハ王宮ヲ護衛シ

鎮壓ヲ努メタリ之ヲ爲メ訓練隊ト侍衛隊ト衝突ハ極メテ輕ク僅カニ二個銃

發^{（？）}ハ砲声ヲ聞キ迄ニテ鎮靜ニ帰セリ國王世子トモ亦平安ナリ唯タ王妃ノ所

在ホ未詳カナラス抑モ事ノ起因ヲ尋ズルニ昨日電稟セシ如ク昨日未宮中ニテ急

ニ訓練隊我兵ヲ取上ケ之ヲ解散シ隊長ヲ嚴罰セシノ詮議ヲ漏シ聞キ一時ニ激

昂シテ遂ニ大院君ヲ奉シ王宮ニ迫リテ事ト察セラレタリ本官ハ國王ノ名ニ應シテ六

時頃参内セリ

三浦公使

西園寺大臣

秘

電報

十月八日午後三時三十分 京城発
十月九日午前九時接

廿八年十月九日
大参第 二九号

本朝暴發ノ原因ハ訓練隊解散ノ内決ニ基ク其解散ノ理由トシテ
特ニ巡查ト闘争ヲ為サシムルノ手段ヲ取り昨夜ノ如キ特ニ巡
査ヲ訓練兵ニ仕立テ夜間警務廳ヲ襲ハシメ又巡查ヲシテ兵
卒ニ不日解散ノコトヲ放言セシメタルニ因ル第二訓練隊ハ
遂ニ今朝兵營ヲ脱シ孔德里ニ至リ大院君ヲ起シテ宮闕ニ赴
ク此間第一訓練隊ハ宮闕ノ諸門ヲ守備セリ第二訓練隊ト
宮中ノ侍衛隊トノ間ニ衝突ヲ惹起シタルモ僅カニ二三十發ニテ
鎮定セリ此際我守備隊ハ國王ノ召ニヨリ鎮撫ニ力メタルモ
死傷ナシ韓人ノ死者訓練隊長ト婦人ニ六卒ニハ確カナリ
國王世子ハ安穩王妃ノ所在知レサルモ他ニ脱レタルノ證據ナ
シ三浦公使ハ午後一時帰館露國公使ハ今朝我公使ニ續

千入關セリ目下至テ静檻ナリ

參謀總長

楠瀬中佐

二十八年十月八日午后四時十分京城發

三浦公使ヨリ

今午前發電後宮中ノ形勢ハ益々鎮靜ニ歸セシ付同九時頃鎮撫
ノ為メ出張シテ我守備兵ハ悉皆引上げ歸營セシメタリ其後寧ノ守衛ハ國王
ノ命ニ依リ訓練隊ヲ以テ侍衛隊ニ替ヘラタリ同八時過キ米露ノ公使ハ御
機嫌伺トシテ参内シ同十時過ギ國王大院君同席ニテ謁見ヲ許セ終テ西公
使ハ本官ヲ扣斯ニ尋ネタリ但シ西公使ハ参内前本官ヲ尋ネタル趣ナルモ本官
ハ已ニ出門後ナルニ付面会セズ金総理金外部安軍部ノ三大臣入闕シ殊ニ金総理
ト外務ハ善後方案ヲキ親シク相談アリシ模様ナリ李載堧ハ宮内大臣ニ金宗漢ハ
同族并趙義淵ハ警務使ニ任セテ其他多少更迭アルベキ様子ナルモ未タ詳ナラズ大
院君ハ今後宮内事務ニ參與セラル迄ニ政務ハ一切干渉セラザルニ決定セテ其趣意
ハ詔勅ニテ公布セラル運ヒナリト本官ハ十一時頃金総理ト金外部ニ面会シ善後方
案ヲ存意見ヲ叩キ、勸告ヲ與ヘタル後十二時頃歸館セリ

廿年十月八日午后十一時五五分京城発

本日午後三時半ヨリ外國使臣打捕上米館今朝事変ノ顛末ヲ尋ネ
々上旨申述ヘタルニ付本官ハ段々電報及ヒタル通り今回ノ事変ハ訓
練隊ニ反對セル党派ガ巡查ト訓練隊トノ鬭争ヲ口実トシ同隊ヲ
解散セシメ謀リヨリ訓練隊ノ兵士大ニ不平ヲ抱キ遂ニ大院君ヲ奉戴シ
テ事ハ終ニ及ビタル等事情ノ概畧ヲ述ベ且本日早朝勅使ヲ以テ傳ヘ
シタル國王ノ依頼ニ基キ我守備兵一部ヲ動シ以テ騷擾ヲ鎮制スル
様等ヲ陳述シタル如露公使ハ王妃ノ所在不明ナルト大院君ノ王宮ニ向
ケタルニ
樂二挺アリテ其前衛ヲナシタルハ日本兵ナルコト今朝日本公使館ヨリ王宮ニ
到ル途中ニモ日本人ハ平服ヲ着シ銃ヲ携フヘタルモノ三十餘名ニ生逢タルコト又

回兵ニモ同シク平服ニテ劔ヲ携ヘタル者ニ三十名ヲ見タルコト又朝鮮兵
カ王妃ノ御門ノ傍ラニ三十人列ヲナシテ並居タ傍ラニ又数名ノ日本兵
モ並ニ居タルガ其場所ノ中央ニ数名ノ平服ヲ着ケテ拔劔シタル日
本人アリテ王妃ノ殿内ニ入リ婦人ヲ引出シ来リ庭上ヲ引キ摺
リマワリ劔ヲ以テ之ヲ殺シテハ又殿内ニ入リ婦人ヲ携ヘ出テ、殺シ
ナカラ王妃ハ何処ニ在ルヤ王妃ハ何処ニ在ルヤト頻リニヨリネツ、其傍ラニ
居合セタル西洋人ニモ英語ニテ何処ナルヤト尋ネタル等ノ事ヲ一々目撃
シタルモノアリシハ如何ナル次第ナルヤト尋ネタルニ付キ大院君ノ禦ヲ護衛
シタルハ決して日本兵ニ非ラズ又婦人ヲ虐殺シタル日本人ノ事ハ秩序
維持ノ任務ヲ帯テ出張シタル軍隊指揮官ノ報告ニナキコト故本官

ニ於テ輕シク信用シ難キヲ又平服ニテ帶劔シタル日本人ノコトハ何トモ
考ヘリカネトモ軍隊附屬ノ人夫共其他諸輩混雜ニ乘ジマギレハ之ヲ
ルモノニモアラニカト述ヘタル処兎ニ角前述ノ事實ハ慥カニ之ヲ目撃スル人アリ
拙者等ハ憂モ之レニ疑ヲ容レズハ事實ハ事頗ル重大ニ居シ此伋觀過
スル能ハサルモノナリ石ナカモ嚴密ナル取調ヲ要スルコト信ス又訓練隊
ハ護衛兵ヲ打破リテ宮闕ニ入リ今ハ却テ之ヲ教言衛シツ、アリ是レ果シ
テ順当ノ事ト云フヘキカ彼レハ取リモ直サズ逆賊ナリ謀反ナリハ謀反者ヲ
シテ王宮ヲ教言衛セシムルコトハ王宮護衛ノ喉托ヲ受ケラレタル閣下ニ
在テ順当ト認メラルヤ實ハ護衛兵ノ事ニ付キ本日拙者が米公使ト
謁見ノ時國王ノ内蒙アリタルコトハ米公使証言セラル、処ナリト述ヘタルニ

付本は、嚴重ノ取柄ヲ要スルコトを友モ付セリ今更ニ使ノ仰セラ
ル事莫ク我守備隊指揮官ノ報告ニ之キヲ依テ速カニ之ヲ信スル能ハサレ
自ラ此種ノ材料ト云ふべシ又復衛兵ノ義ハ此處迄ナト相考ヘシ付交代ノ
事ヲ政府ヘ報告スルコト申述スル所ニ使ハシ今更ニ使ハシ今更ニ使ハシ
「英」總領事館ヘ之ヲ呈上シ最モ再ヒ斯ノ騷擾ナキコト信セラルカト云
ハシ付何
分世子(保証)兼ヌト云ハシ若シ覺束ナシトナシバ各自ニ用心スル外ナシト
シ又終リニ露公使ハ日本ノ公使ガ土地ノ治安秩序ヲ維持スルニ於テ兵ヲ
有シカラスルニ至リ来ルハ如何モ殊会ニ之ヲ信スルコト云テ一回相分ナリ
右記既ノ機略不取敢具報ス

西園寺大輔

三浦公使

極秘

電報

十月十日午前十一時四十分京城発
十月十日午後零時十五分着

續テ静徳ナリ善後策ニ就テハ威ルベク他國ノ非難ヲ避クル
手段ヲ取ルコト必要ト存ス就テハ守備隊ノ働キ我が為
メニハ最も善ク且ツ正當ナルモ他ヨリ見レバ非難ノ點ナキ
ニアラズ幸ヒ交代ノ事ニ内決ト承リ居レバ速クニ交代
セシメ表向キハ此度ノ勤作ニ就キ審問ノ條アリテ特
歸國ヲ命シタル様ニ發露セバ好都合ト存ス

京城

楠瀬

大本營

川上中將

右ノ回答トシテ左ノ電報ヲ發シタリ

楠瀬中佐へ

十月十日

京城守備兵交代ニ関スル電報落手ス善後策ヲ取
ルノ必要ナルハ勿論ナレ其手段トシテ此際軍隊ヲ交代
セシムルハ不可ナリ特ニ審問ノ名ヲ以テスルガ如キハ到底
行ハレ難シ但シ何故ニ斯ノ如キ要求アルヤ其要領ヲ得
ズ貴官ノ電報中他ヲ見レバ非難ノ點ナキニアラス
ト云フコトノ如キハ其解釋ニ苦ム依テ詳細申越アル
ベシ

大本營

川上中將

秘

十月十日午後八時仁川発

今全全土時二分着

今朝四時露國水兵二十名武装し當地ヲ
発し入京せし趣ナリ目下其實否ヲ取調
中ナリ又英國軍艦ヨリモ同様水兵ヲ京城
送ルヤノ聞ヘアリ右報告ス

仁川高井兵站監

川上兵站監

極序

電報

十月十日午前十時五分

京城發

大本官

京城

川上中將

楠瀬砲兵中佐

答此ノ度ノ事變ハ訓練隊ノ不平ト大院君ノ希望
君側ノ奸物ヲ剷滅シ革新ノ實ヲ舉グル趣意ヲ
前以テ承知リコトナレハ侍衛隊ト訓練隊ノ衝突ヲ
鎮撫スル筈ナレバ勢ヒ訓練隊ヲ助クル結果トナ
レリ又聞キテ口ニ依レハ王妃モ終ニ山崩御ノ悲境ニ
立チ至リ外國人ヨリ見レハ守備隊ハ我カ爲メハ非
常に勉メタレバ暴徒鎮壓ニハ致クル知アリヤノ疑
アリ各國公使ノ政變ヲ之レアリ尚ホ國王ノ恩召モ如
何ト鬼心ハ審問云々ハ鬼モ角ト先リ交代セシ

ムル方、穂カチシ、此件ニ就テ、小官ノ任地ヨリ申シ
重ルコトモアレハ、公使ヨリノ報告、得テ、御高覧ア
リタモ、御備隊ノ一部、最初此ノ以テ、抗抵ニテ、敗退セ
ルヲ見、受ケタリ、士官ハ、十二名ノ外、盡ク、豫備ノモノニ
テ、兵ハ、皆テ、帰國ヲ、渴望、居ル、折衝ナレハ、不安心ノ点
ナキニ、アラス、當、地、目下、如キ、日、軍、説、ナレハ、成ルベク、完全ナ
ル、常、備、兵、ヲ、置、カ、セ、タ、キ、ハ、望、ミ、アリ、之、レハ、内、方、ノ、御、意、有
キ、事、候、申、上、サ

秘

十月十一日午前六時五十分仁川発

全全全八時四十分着

今年前四時乗船小蒸浪にて米團士官

二名水兵十二名武装ヲナシ京城に向

へり

川土兵粘總監

仁川高井兵粘監

廿八年十月十二日午所九時五十分

西園寺大臣

三浦公使

去ル日官報外ヲ以テ王所氏ヲ廢スル旨ノ詔勅ヲ公布セリ昨十日外部
大臣ヨリ公文ヲ以テ廢所ノ通知ヲナセリ依テ此段上申ス又昨日官報外ヲ
以テ廢所氏ニ特ニ嬪御ヲ賜フ旨ノ詔勅ヲ公布アリタリ

廿八年十月十二日午所九時三十分

西園寺大臣

三浦公使

王所氏既ニ廢セラシムルニツキ韓廷ハ更ニ王所ヲ立ツルミ内定ニ近
日發表セラルベシト云フ

廿八斗十月十日 着

外務大臣

廣島

小村政務局長

今夜十時 敦賀丸 出帆 不

電受一〇七七号 十月十日接

米露水兵上陸ニ付本邦人ト衝突豫防ニ関スル御電訓ノ
趣承知セリ仍テ不取敢飲食店其他壮士輩ニ対シ嚴
重ニ警告戒ヲ加ヘ且ツ水兵外出時間ヲ見計ヒ角袖巡
査ヲシテ外出中始終之ニ尾行セシメ本邦人ヲシテ
之ト衝突ナカラシムル様取計ヲ告ナリ右ノ方法ニ
依リ充分其目的ヲ達シ得ヘキ見込ナリ

内田領事

西園寺大臣

電受。七九号 十月十二日着

西度ノ電訓承知セリ取締方充分ニ注意セリ米
露水兵上陸ニ付テハ行遠ヒサノ一更ニ懸念ナ
シ

橋口領事

西園寺大臣

明治廿八年十月十二日着

露西軍兵ノ上陸ニ付所懸念ノ趣ヲ領取本官ニ
於テモ意分ノ達ス意ヲ知ハキ精細ナル訓令ヲシテヲキメリ
我兵士ハ隊伍ヲワケリ士官ノ附添ヒソルニ執サレハ一切
警所ヲ出テシメサルコトニセリ又日本人民ノ取替ニ関
シテハ銀事ニ歳令ヲ費シテリ尚山取替ノ件ニ付
テハ各因ノ使臣ト懸概スベシ

三浦公使

所屬さよふか

明治二十八年十月廿一日午後二時至五時

昨日選同水兵十五名士官一名入事モリ當地
其後有操極ノテ靜穩ナリ

小村公俊

西園寺公望

秘

七

電報

十月廿四日午後七時五十分
亨品發着

田中三七小野正衛二名、退韓、身立訂
正

亨品 永田中佐

運輸通信長官部
寺内長官

名称	大山 巖文書
標題	関妃事件調書 十七通一綴 明治廿八年 自十月十五日 至十一月廿二日

分類 番号	F VII
	480+(80)
	4

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

大山寺

春日山寺

雲々

唯今捕浪中依へり致さるる
命に廣島へ護送せしむる
ナリと云ふ事あり

ナリと云ふ事あり

十月廿六日午前八時三十五分發

尾張丸今似島三着便乗者三浦公使外
十六名委細後

幸品

永田中丞

寺内少將

十月十五日所
見外三十一日

尾張丸乗組者高島田行路之妻及臨撫ノ
上上陸ヲ許ス其人員ノ重尤モハ、星首ノ
其他ノ看護人電信書記下士ノ患者ト
星ノ部下三名ナリ外、星ノ一行ノ田中賢道
川邊彦太郎ノ馬込人ニ上陸セリ

定五

永田中

李の少将

十月廿一日午後五時三十五分仁川發
八時三十分 着

寺内少將

仁川高井兵站監

昨夜發ノ電報領收ス 筑後川丸ハ今更商船ノ名
義ニナスハ反テ不可ナルヲ以テ矢張り官ノ借上トナ
セリ又退韓者ノ衛兵ハ特ニ附セス 憲兵士官一
名上等兵二名歩兵軍曹以下八名帰国ノ名義
ヲ以テ監視警戒ノ為ノ乗船セシムルコトセリ退
韓者ノ中所持セル刀劍類ハ本ハ船内倉庫ニ
納メシメタリ依リテ取上ケノコトハ止メタリ若シ要
スレハ宇品着ノ上護身ノ具取上ケノコトハ該地
通信部へ御下令ヲ望ム

大本營

退韓者岡本柳之助妻子三名後者二名止ム
ヲ得サル事情アリ同船ヲ許サレ度吉橋口領
事ノ請求ニ依リ何レモ乗船ヲ許シタリ
此船ハ今午後五時出帆宇品ニ直航セシム
三浦公使昨日下仁楠瀬中佐ト共ニ尾張丸ニテ
帰朝ノ豫定ナリ

乗船者人員ハ憲兵病人ノ外此亦四郎退韓者
廿四名眷族者五名ナリ其人名ハ領事館ヨリ外
務省へ電報スルヲ以テ畧ス宇品ハ人名書ヲ
送レリ

秘

十月廿六日

時軍分發
土時三十分

運輸通信長官部

尾張九人、入港者中三浦公使楠、頼中佐、合狀執行、受、
退韓令狀執行、受、高人佐之政之中村建雄、
新聞記者、小早川秀雄、三名、三浦公使、從者渡辺正之助、
廣沢梅次郎、末綱安次郎、山本嘉次郎、矢野市一、石倉
俊、楠、頼、從者玉川宗次郎、七名、退韓、外、留學
朝鮮士官五名、了、

字品

寺内少将

永田中佐

唐島寺

兜衣

唐島寺

楠瀬ハ下通り訊問ヲ為シ留置ヲ命

ズルニ至サレドモ未ダ終ラズ

ナリナリト云フニ其ノ時ナリト云フ
ナリト云フニ其ノ時ナリト云フ

春田家子

十一日

九叶草

九母巴子子眉

児玉次官

春田憲兵戸長

本月第二面ノ訊問ニ先ダ各據方行荷物ヲ
搜索シタル処馬來一マキ大尉ノ手帳ニ参考
トナルキモノアリテ之ヲ押收セリ此手帳ハ大ニ
訊問ノ材料タル見込アリ其他ノ取調ハ未ダ
真相ヲ得ズ

十一月二十日午後八時四十分迄

ハ付五十分アリ

見玉次良

春田憲之介

過刻電報シム通リ本日ハ三十餘個、荷物
ヲ韓人立會ニテ取調べ其後僅カニ昨日訊問
ノ不備ナル処ヲ取調べタル迄ニテ終リタリ昨日
來陳述ノ大要ハ訓練隊ノ衝突ヲ鎮撫シ大院
君ノ入闕ヲ容易ナラシメタリト云フニ過ギズ其時
放火ハモトヨリ装填ヲサエセズト云フ位ナリ
十一月二日午後十二時十八分
ナニナリ

千法三妙也十妙也

陸軍省

陸軍省

児玉次郎

春日武蔵守

楠頼、午あすの時にギガ上室女本部へ
引致し、本人柱を静肅ナリ訊問、概
要を追テ申報ス

又朝鮮國武官、楠頼、自行し、え者
亡氏曰人、従者ニテ始末ヲナシ得ん、
ニハナ敢テテ歩もス

史記の友

春日富子氏の友

岡本初メ豫審、於テ一應訊問、摸根ヲ
聞ク、大隈君政府改革、目的ヲ以テ
入味、之ヲ顧問ノ依頼ヲ受ケ、又ハ
護中ヲ信託セリ、随リ、之ニテ
先行殺戮ノ事ハ、意ニ合ハズ、未ダ
ナレカ、妙ク陳述シ、之ニ中ノ事、
アルコト知リ、之ヲ物ニシ、之ニ
アリト見ルモ、之ヲ應ノ過キ、
事又、要領ヲ得ル、之ヲ甘シ

陸軍省

十日、午後、之ヲ甘シ

陸軍省

廣島

児島支隊

春田支隊

筑後川丸ニ本日午後一時二十分似島橋
渡下ニ着ク諸毒満日下ニ於テ紫
本初ソニ十二名ニ如方好し友合状ヲ執
行し七時三十分頃宇島ニ上陸し直
廣島の復送セリ仁川ヨリ松山富山
是少尉上中兵六名ヲ率ヒ復送シ来
ル既而半及ニ状既ハ條モ静穏
ニ異状ナリシ

十月廿四日 夜十二時五十分

ちりちり

思ふに支

春田憲兵に支

雲文

尾張丸に浦公使が榊原中令等ヲ執セ
りあす時十分似易く易く清毒済む
川はノ多純なり又ハ解武女五名
斗せ所ん中子し榊原ノ連て来りん
モナレハノ時宿舎よりカシメ保護持釋
ヲ請フ見はナリ

ナリナルなりあ九時ナリ支

4742h

上理

陸軍省

史記卷一百一十五

先般御内訓ヲ奉ニ廣島へ出張ニ林憲兵隊長ヲ指

揮ニ楠瀬中佐以下七名^{舞臺大尉ハ未タ取朝セズ}各歸朝スルヲ俟テ第五

憲兵隊ニ於テ直ニ檢察処分ニ著手セシメタリ而シテ小官

在廣中訊問ノ上ニ就キ檢舉シタル処狀況ヲ概括スルハ

一十月八日朝鮮國京城ニ於ル事變ノ際京城守備隊^{則後備歩兵第十八}

^{大隊ハ豫メ三浦公使ヨリ大院君訓練隊ヲ率ヒ入關スルニ付}衛隊ト衝突スルモ四ルヘカラス若シ然ル片ハ之ヲ鎮撫セヨ尤モ

大院君入關ノ目的ヲ達セシムル如ク援助スヘシトノ命ヲ受

ケ其第一中隊ハ孔德里ニ赴キ大院君ニ跟隨シテ王城ニ

到リ第二第三ノ二個中隊ハ大院君入城ニ先キ諸町ニ

憲兵司令部

配置シ警備ニ任シタリ其諸町警備ノ任務ハ「朝鮮人」出

入ハ一切禁止ニシ外國人ノ出入モハ之ヲ許シ入ルモノハ暫ク見合サスヘシトナリ

獨リ馬來大尉ハ殊ニ王妃ヲ取遁スカレトノ命令ヲ受ケタリト

云フ然レモ馬屋原以佐ハ如以命令ヲ援ケス婦人タリモ出

入ヲ禁止セヨト命令タルナリト云フ又他ノ大尉ハ之ヲ知ラスト

ニ大院君既ニ光化町ニ入ラセトスルヤ洪啓薰訓練隊ノ

一部ヲ率ヒ側方ヨリ來リ守備隊ノ一個小隊談町警備

ヲ爲シ(舞臺大尉臨時之ヲ指揮ス)居タル処ニ迫ル故ニ舞臺大

尉ハ奉銃ヲ以テ射撃セシトシタルモ不發ナリシ其際後方ヨリ

發射シタル彈丸ニテ洪啓薰ハ倒レタリト以舞臺大尉ノ

後方ヨリ射撃シタルモノハ守備隊ヲヤ否ニ至ラズ舉証

ナシ唯多分日本兵ナラシト供述スルモノアリ然レ馬屋原サ佐ハ各中隊引揚後直ニ檢査ヲ為サシメタルニ彈藥消耗ナシト供述セリ

三字傭隊第一中隊ノ大院君ニ跟隨シ来リタルハ先此町内ニ停止シ兩側ニ整列セシメ毫モ散乱シタルモノナシト云フ其他各町ノ警備ニ任シ先第二第三中隊ノモノモ城内ニ入リタルト云フ然ルニ高松大尉^{當日訓練隊付屬}陳述ニ勤政殿ヨリ奥ノ方ニ宮本少尉外日本兵五六名ノ居タルヲ見受ケタリト又石森大尉^{當日訓練隊付屬}陳述ニ大院君ノ國王ニ謁見アリシ際其宮殿ノ邊ニ到リタルニ訓練隊兵五六名日本兵十人餘リ日本壯士朝鮮壯士混交シテ二十人許宮殿周

憲兵司令部

邊ニアリシヲ見受ケタリト陳述ス然レ其日本兵ノ何レヨリ入リタルモノナヤハ未タ詳ニスルヲ得ス

四字傭隊全體當日ノ勤作等訊問ニヨリ檢知シタルモノ概ネ前項ノ如ク而シテ其隊長タル馬屋原サ佐ハ十月六日ニ於テ公使ヨリ國家重要ノ件アリテ大院君訓練隊ヲ率ヒ入關スルニ付云々ノ余ヲ受ケ尚其翌七月ニ至リ翌明八月大院君入關ノ一ニ決シタル旨示サシタルニ依リ同日中隊長等ヲ會シ大院君入關ノ一及ニ部署任務等ヲ命じタリト云フ其以前ニ於テ曾テ此事ノ事情ヲ聞キタルナシ又々楠瀬中佐トハ當日モ深々談話サセサリシト云フニアリ

五楠瀬中佐ハ朝鮮ノ形勢日ニ非ニシテ政權閥族ノ手ニ歸

スル機強ト且タニ迫リ終ニ大院君ノ蹶起セトスルヤ三浦
公侯ハ暗ニ之ヲ援助スル腹案アリトハ之ヲ知リ然レ氏
毫モ相談ヲ受ケテナシ又十月初旬ニ於テ大院君
ヨリ誓約書ヲ取リタリトノ談話ヲ聞キタリテ然レ大院
君入闕ノ何日ヤハ未ダ知ナリト時ニ自分ハ弥飯朝スル
決シ七月午前三京城ヲ出發シ仁川ニ至ルヤ爲ニ於テ歸還
ノ電報ニ接シ再ニ京城ニ引返シ公使館ニ著シタハ八
日午前三時頃ナリ然レ公使睡眠中故杉村書記官
方ニ至リタハ七日ニ安駟壽來リ訓練隊解隊ノ一聞
氏入闕ノ一尋申来リタハ故訓練隊解隊トナレハ大院
君ノ企圖モ水泡ニ属スルヲ以テ弥八日ニ大院君入闕ト

憲兵司令部

決シ守備隊ハ鎮撫ノ爲メ入城ノ手段モ定メリ云々ノ談話
アリタリ夫レヨリ服装ヲ変シ守備隊營ニ至リタハ既ニ各中
隊概ネ出陣シ風紀衛兵外少數ノ兵アリシト云々
段トシテ守備隊ヲ集テ出スカ如キハ抑モ自分ノ所見ニ及ス
況ニヤ壯士ヲ利用スルカ如キハ最モ正反對ノ必指ナレシ
毫モ意見ヲ述ヘス無責任ニ傍觀シ居タリ云々又我對
韓美ニ付テハ最早尋常手段ニテ申来ノ方針ヲ維持
スル能ハカハ何人モ知ルハ故ニ望シテ他邦ノ手中ニ移サセヨリ
寧ロ大院君ノ意旨ヲ援ケ從來關係ノ會談ヲ維持シ
若カス萬一爲メニ外交問題トナリ止ヲ得サル場合ニナリト
只其時之ヲ手放スモ尚拱手之ヲ棄ルニ勝ルモノアリト

所見ハ抱懐シ居タリト云フ蓋シ其意朝鮮國ノ禍根ト
目スニキモノヲ除去スルニ在ルヲ如シ

大又楠瀬ノ供述ニ依ル當時全ク明朝ノ意ナリシカ如クナレバ
之ニ對シ地方ヤ判所豫審庭ニ三浦新公使ノ訊問
ヲ常メタル其供述ニハ京城ニ不日事變アルカ如ク風説スル
ニ至リタルヲ以テ固本同様物議ヲ避ケシムル爲メ明朝ヲ
名トシテ仁川ニ赴カシメタリ云々トアリ

セ当日大院君ノ率ヒ入城シタル第二訓練隊ニ馬屋原
ハ三名ノ大尉ヲ付シタリ其事由ハ訓練隊ノ勤作ヲ見
セシムルニアリト言フ

八字備隊長第二中隊長村井大尉ヲシテ第一訓練隊ヲ

憲兵司令部

王城後方ニ配付スル指揮ヲナシメタリト云フ

以上口供ノ要領ト字備隊ノ勤作トニ徴スルハ公使大院君入
闕ニ際シ豫メ事變アルヲ期シ字備隊ヲ以テ其警戒ニ備ヘ
且大院君ノ入闕ヲ妨害スルモノハ之ヲ拘捕セシムル意ヲ以テ
字備隊長ニ命令シタル及ヒ字備隊ハ其意旨ヲ体シ任務
ニ朕シタルハ明カナリ然リト雖是尙表面ノ一ニ其城門ノ守
衛ニ任シタル馬來中隊長ノ供述ニ「朝鮮人ハ一切出入ヲ禁止セヨ
殊ニ王妃ヲ東遷スル勿シ」又事變後各中隊長、與ヘタル日本兵ハ
一癸モ射撃セサルヲ言ヒ傳フヘシ日本軍人外ト雖日本刀ヲ以テ殺
サルト云フヘカス」等ノ命令或ハ訓諭ノ如キ其他諸テ訊問ニ
對スル陳述ノ頗ハ渋滞スル等ニ徴スルニ未タ茲ニ舉証シ

得ル東面ニ一物アリシカ如キハ先分推測スルニ餘アリ況ニヤ
小官出突前内示セラレタハ韓地ノ情報ニ照スモ頗ル嫌疑
ノ存スヘキモノナリ然レモ今一步ヲ進メ東面ニ伏在スル事情
ノ有無ヲ検索セシハ尚在韓一二ノ士官及ヒ事ニ當リタハ
下士兵ヲ訊問舉証スル外最早他ニ手段ナキニ至リ
以上検索処分進行ノ状況ヲ一覽ニ便スル為メ真ニ概
要ヲ摘録シタムニ過キス其詳細ニ至テハ口頭ヲ以テ内申セ
トス

右及後命候也

明治三十八年十一月十二日

憲兵司令官春田景義



憲兵司令官部

第十二回報告

本月十二日第五憲兵隊ニ於ル訊問調書ニ依リ是迄
被告ノ供述セサリシ當時ノ狀況ヲ按察スル左ノ如シ
馬未大尉供述ノ摘要

大院君入城ノ際先化門閉鎖シアリシ故日本壯士三
名程階子ヲ以テ該門ノ西方ノ長屋ヲ越ヘ抜カシテ
城内ニ入り開門シタリ

又馬屋原水佐ヨリ大院君入城ノ際先化門閉鎖
シアルハ階子ヲ以テ踰越シ開門セサル可カラス依テ階
子ヲ懸ルニ必要ノ人質ヲ堂内ニ殘シ置ケトノ事

憲兵司令部

ニ付之ヲ除キ置キタリ然ル処前ニ述フル如ク壯士三
名程先化門ニ來リ自分ニ向ヘ末々開門セサルヤ

大院君ハ最早來ル故速ニ開門セサルハカラス階子
ノ用意アル筈ナリト云フ依テ堂内ニアル越ヲ答ヘタル

ニ壯士等堂内ニ到リ殘シ置タル兵卒等ト共ニ
階子ヲ持來リ入城開門シタリ尤モ兵卒ハ階子ヲ懸

ケル手傳ノミニテ入城セズ故階子ハ守備隊ニ於テ兵卒
ヲシテ依テシメタルモノニテ長サ拾間程モアリ故ニ兵卒

拾余人ヲシテ其持運ヲ手傳ハシメタリ

又宮本少尉ノ話ニ大院君ト大君主陛下ト御
對話アリシ一日本壯士カ王妃外一人ノ婦人ヲ塔

山々々

春日山家集卷之六

雲々又

唯今補注中依之引致之古

命之廣島之護送也之々々

ナリ之々々

児玉沼友

車田室多るる友

〇〇〇〇
ハ不

豫案庭ニテは士平山ノ自白ニ宮内大臣
ヲ最初射撃ニシテハ少尉ニテ後々ニ
タニ自分ナリト其他ヨモハバ陳述ニ依ルモ
宮本ハ最も疑アリ又南越尾張九トモ
海上以收為メ未着ナリ

ハナナリナリ
ナリニナリ

名称	大山 巖文書
標題	十一月事件 十九通一綴 明治廿八年 自十一月廿八日 至十一月廿九日

分類 番号	F VI
	48-(81)

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



電報

十一月廿八日午前七時四十五分京城發

八時廿六分着

大本營

川上中將

京塚

田村中佐

昨夜少シ騒キタリ我兵関係ナシ。其成
リ行キワカラス

電受第一二八號 廿八年十一月廿八日 午前八時十五分 接

外務大臣

小村公使

旧侍衛隊が宮闕ヲ襲ヒマシトノ報ニ接シ本官ハ國王ノ御機嫌ヲ伺ヒ且ッ
事實ハ如何ナルモ只今ハ廟ヲ護衛スル巡査ヲ用ヒ兵卒ハ之ヲ引去ラス
格別ノ事ハアルモ信ス猶委細後ヨリ上申スベシ

電受第三八九號

其年正月廿六日

午前九時三十分
午後十時三十分
着

西園寺外務大臣

内田領事

昨夜十二時頃王宮ヲ襲ヒタル暴徒ノ主謀者ハ當國人リ
ハンピン
及ヒ米國人
アングアウツドナル者、由ニテ日本人中關係者アルヲ
聞カス
尚ホ取調ノ上具報スヘシ



電報

十一月二十七日 午後三時三十分發
七時十五分着

大本營

川上中將

京城

田村中佐

李範^{ニテ}亞露國公使館ニ逃^ケ込^ミ居^リ三百斗^ノ

人^{ニテ}今夜子^ノ刺王宮ニ闖入スル^ノ隱謀顯^{ハレ}然^リ

理大臣ト軍務大臣ヨリ之^レヲ鎮撫スルコトニ就^テ悞^リ

議アリ^ノ為^メ公使ハ今内閣ニ行^ケリ

李周會^{前ノ}軍務悞^年罪人トシテ捕縛セ^テル

電報

十月廿八日午後十時三十分 京城發

朝鮮ノ現内閣ハ井上伯耆來ルヲ大ニ恐レシ
居ル其恐ルハ占ハ此ノ前未リシハノ如ク大
院君^{テハ}ア^レ嬰^テ覺^テア^レ何^テミ^テ引^レ入^レテ内閣
ヲ動カセガセ^イ（瓦崩）セシムル様ノ^フリ^ヲ為サ^ルルヤ
ト大ニ掛念スル様子ノ井上伯耆來リテ朝
鮮ヲ分テ取リス^ニ談判^シテ露國ト開クノ風
説アリ信^疑ヲ^モ露國公使館^ノ問ヒ來
シ名^スニ^由巾^ヲ奉^テ考^ノ方^ノ報^スニ^馬屋^原
等^ハハ^ハ日^ノ前^ニ立^テ出^テ帆^ヲ起^テ後^ニ丸^ニテ^リ帰^ルス
大本營

田村中佐

川上中將

秘

電報十月三十日

午前十時京城發
全十一時着

当地ニアル各國公使ハ過日ノ使臣會ニテ魯國公使ノ提案ニテ訓練隊王城ヲ守備シ
アリテハ陛下ノ御身体甚タ氣付カハレ速ニ之ヲ除カントノ事ナレドモ小村公使ハ之ヲ
除クトキハ忽チ匪徒四方ニ起リ又之ヲ行フニハ兵力ヲ要スルモ計ラレス然ルハ如
何ナスヤト若ヘタルニ彼等曰ク若シ兵力ヲ要スルハ日本兵ヲ用ユルヨリ仕方ナシ
小村曰ク然ラハ其事大事件ナレハ熟考ヲ要ス猶豫ヲ去ヘヨト計リタリ其後魯公
使ヨリ訓練隊ヲ除ク催促アリタレトモ目下之ヲ解クハ却テ騷乱ノ種ヲ蒔クニ
均シ又陛下御身体ニ危險アルトモ認メス之ニ付テハ日本公使其責ニ任シ保証スト答
ヘタリ然ラバ然テ日本公使ニ任セルトノヲニテ昨日電報セシ如ク訓練隊ノ二大隊長
ヲ除キ且ツ訓練隊モ廢シ更ニ京城ニ親衛隊ヲ地方ニ鎮衛隊ヲ置クノニ改メ今日
勅令ヲ以テ發布セリ之レニテ魯國始メ兵力ヲ以テ当地ニ事ヲ起スハ有ル間敷ト
愚察ス

川上中將

田村

秘

電受 一二〇八號

十一月一日

午前十一時十分
午後四時十分
午後五時十分

西園寺外務大臣

小村公使

訓練隊ヲ解散シ更ニ同隊及侍衛隊ノ中ヨリ親衛隊ナルモノヲ
組織シテ五字守衛ニ充テ平壤及金州ノ訓練隊リ親衛隊
ト改称スルコトナシリ
ウハニ義、李斗鎬ハ休養ヲ命セラル

參濟

電報

十一月廿六日

午後八時

五十分

着

着

着

着

着

川上中將

田村中佐

人テは國主ハ各國使臣ヲ召シ廢妃ヲ復位シ軍部大

臣趙義淵敬務使権深鎮ヲ免シ王妃ハ劇ス罪

人ヲ嚴重取調バルト云フコトヲ告グ各國使臣ハ満足

ト云フ云々ヲナセリ併シ露米ニ公使ハ廢妃ノ勅令

初メヨリ陛下ノ真意ヲ非ラサルト認メ居ルト語ヲ添

ヘタリ

軍務大臣ハ魚兄中之レヲ重ネ許璉敬務使ニナル

趙権ノ二人ハ自宅ニモ寄向ラス王宮ヨリ城外ニ逃ケ

タリ

大院君ハ依然王宮ニ在リ兩三日目前内閣自協議

ニ大院君ヲ幽閉スルノ計畫アリシモ破レタル為メ

趙權二人ハ大院君ヨリ怒リテ受ク
此上無事ニ治ルヤ否ヤハ何トモ見込ナシ

電受第一三八號 庚午年 青

廿六日午後十時七分 癸
廿七日午前一時三十分 看

西園寺外務大臣

小村公使

井上大使出發後金總理來館ノ上事妥善後策トシテ本官ノ意見ヲ問ヒタル
ニ付本官ハ一個人ノ資格ヲ以テ外國ヨリ迫ラル、ニ先チ朝鮮政府自ラ進テ
必要ノ處置ヲ斷行スルニ如カサル旨ヲ答ヘルニ同總理モ同様ノ意見ニテ
另來政府部内ニ於テニ三大臣ハ頻リニ之カ手段ヲ運ニシツ、居リタリ然ルニ
其結果トシテ昨夜ニ至リ宮内大臣ヨリ本日午後ニ時國王ハ本官始メ各國
公使ヲ御引見セラル、旨通知アリ即チ同各國公使參内國王ニ謁見致シ
タルニ國王ヨリ勅令ヲ以テ廢妃ニ關スル勅令ヲ取消シタリ又事妥當日ノ犯罪
者ハ逮捕ノ上夫々處分スヘキ旨ヲ當局大臣ニ命ジタリ故ニ各國公使ヲ引

見し此事ヲ披露セント欲ス云々トノ御辞アリ各國公使モ一同満足ノ意ヲ表シ退
出セリ

又軍部大臣趙義淵發務使権深鎮ニ氏ハ免官ノ處分ヲ受ケ軍部大臣ニハ「リドウ
サイ」(元全列監察使)發務使ニハ「キヨシン」(元カンコウ監察使)新任セラレタリ尤モ
「リドウサイ」ハ目下郷里忠清道ニ在ルカ故其上京迄ノ間ハ度支大臣與允中兼任ヲ命_{サレ}ル
親衛兵(先キ訓練隊)現在將校兵卒ハ國ヲヨリを罪ニ付キ忠勤スヘシトノ意味ニシテ
懇望ナル勅諭ヲ下シ將校兵卒一同大ニ安堵ノ模様ニ見受ケル然レモ本官ハ
右軍隊_{ハ、勅諭の因るものなり}トウヨホ國政府キヨウ(？)深ク注意ヲ加ヘ居シリ
以上ノ顚末井上伯ヘモ傳ヘラレタリ

電報

五月七日午前十一時發

大本學
川上中將

京
田村中佐

軍務大臣
前キ、全羅道監司李道
寧全
兵概シテ靜穩ノ様子ナレ
大疑ヒ懼レ居ル
西大隊長ハ

電受第三九〇号共年九月廿日 午後三時五分發
九時五十分着

西園寺外務大臣

小村公使

王宮ニ小事爰アリリ其顛末ハ此頃現内閣ニ反對スル或ル部分ノ者
密カニ旧侍衛隊(八百六十名)ハコウタイ若干ヲ煽動シ目下王宮内護
衛ノ親衛隊(元訓練隊)ト聯絡ヲ通シ依テ王宮ヲ襲ヒ内閣ヲ乗
取ントノ陰謀アル由ヲ探知シ且ツ時機モ頗ル切迫セル趣ハ昨夕本
官ハ金総理兼軍部大臣代理ニ面會シ此際充分警戒ヲ加ヘ且ツ
能フベクンバ事ヲ未然ニ防抑スルノ得策ヲ旨懇々談諭致シタルニ
親衛隊長等モ陽ニ陰謀者ニ加ハツテ加擔ノ意ヲ表シ内應スヘシト欺キ
暗ニ彼等ノ計畫ヲ探リ得テ多少ノ警戒戒ヲ加ヘ居リトノ返答アリ

タリ果ヤハ哉今午前三時頃旧侍衛隊ノ兵卒二名當館ニ来リ一片ノ
通知書ヲ差出セリ其文中我々軍卒等王宮ニ押入り逆賊十名ヲ討
滅スベシハ我軍隊ニ於テ動揺ヤサハ桶致シ吳レヨトノ意味ナリ依テ
其兵卒ヲ訊問セシニ彼等公類ハ隊長ニ引カレテ先程王宮ニ向ツテ
侵入セリト答ヘ早々立去ラントセシニ依リ暫ラク之ヲ留メ置ケリ然ルニ
之レヨリ先キ我カ歩哨ハ午前一時半頃王宮方位ニ三発ノ銃聲ヲ聞キ
次テ又三時頃呐喊ノ聲ヲ二三度聞キタリト報セリ彼是冬酌スルバ
旧侍衛隊ノ全部ハ王宮ニ押入ラントシタルモノ、如シ故ニ右留メ置キタル
兵卒一名ヲ放チ遣リ彼等ノ隊長ニ歸リ云ハシメテ同隊ハ目下王宮ニ
迫リ乱暴ヲ行ヒツアルモノ、如シ就テ即刻鎮壓ノ爲メ我軍隊ヲ派

遣スヘシ故ニ若シ我軍隊ノ至ラサルニ先テ汝等解散セハヨシ否ラザシハ其咎ヲ
免カルヘカラスト（是レ一時ノ虚喝ニ過キザレドモ彼等ニハ頗ル恐慌ヲ東スヘ
シト想像セリ）彼ハ直チニ其營ヲ指シ去リ而シテ本官ハ一面実況取
調ノ為メ巡查二名ヲ王宮附近ニ派シ又一面ニ田村中佐ウサガワ隊長ヲ呼
寄セ我軍隊ノ取締向キニ居留人保護ニ関スル打合ヲナシタル上王宮ニ
赴キ金総理兼軍部大臣代理ニ面談セシニ旧侍衛隊兵士并ニ壯士体韓
人數百人今朝一時半頃ニシセイ門ホクニヨウ門ノニケ所ニ押シ掛ケ或ハウ
ウホキヲ踰ヘ或ハ門扉ヲ破壊シテ宮内ニ闖入セシヲ以テ親衛隊五
小隊之ニ當リ巧ニ防禦ヲナシ其先頭ニ立つ中隊長ニ大隊長一人
兵卒五名并ニ利刀ヲ携ヘ居リし刺客体ノ者四人ヲ捕縛シ其他ハ

悉ク宮門外ニ追ヒ退ケタリ彼等ハ大ニ失敗ノ体ニテ一部ハ侍衛隊ノ兵
營ニ歸リ他ハ散乱セリト云フ其後宮内平穩而シテ只今迄取調ヘタル處ニ
ハ此事多ノ主謀者ハ李載晉等ノ一派ニシテ西洋人中二三ノ者之ニ加リ
タルカ如シ猶モ探索中ニ付キ事實ヲ確カメタル上電報スベシ

秘

電報
十月二十八日
午後三時五十分東京發
三時五十分着

王宮ハ異状ナシ

川上中將

田村中佐



電報

五月廿八日午後七時五十分東京發
八八八 中時三十分着

今回ノ事變ニ關係セシ疑ヒアル外人ハ米國人
ガイ、(不明)宣教師三書記官アーレンスト露
士並公使館員ナキ(不明)○昨夜ノ舊訓練隊ノ
働キニ感服セリ之ハ日本士官ノ訓練ノ結果
即チ其賜モノナリ為ニ軍勢ガツジトハ(不明)
殊ニ我が公使ニ謝スル旨ヲ述ベタリ之レニ付
國王大ニ喜ベリ

川上中將

田村中佐

電受第一三九一号 廿年正月廿八日 午後七時三十分發
十時八分着

西園寺外務大臣

小村公使

今朝電報にタル事件ニ付キ尚ホ安シク探偵シタルニ日本人ハ全ク關係
シ居ラス又本日米國公使ヲ訪ヒ各國公使會同ノ席ニテ今朝電報セシ
主意ニテ自分ノ探聞ヲ披露シ續ヒテ他ノ公使等ノ聞込タル事ヲ
モ聽カンヲ求メタルニ米露英三國公使ノ如キハ今朝ニ至リテ之ニ
關シヨクジノ為シタル舉動ノ外何等ノコトヲモ語ラス又其ノ事變ノ
原因等ニ至リテハ露國公使ノ如キハ全ク沈黙シテ想像ヲガモ言ハ
ズ彼等ハ一般ニ今回ノ事ハ日本人ノ關係セサルコトニ付テ寸毫モ疑フ存セ
サル如ク見受ケタリ又此起因ニ付キテハ素ホヨリ充分ノ調査ヲ遂ケタル上

ナラテハ断言スル能ハサルモ、或ル立派ナル人物ハ關係シ居ルヲ關シ打テ消スベカラ
サル。詎據アルヤミ聞及ビタリ。外國公使等ミ於テモ之ヲ默認シ公使以外ノ
モノミテ多少ノ關係シタル者アリトノヲモ聞込ミタリ。是レ或ハ事實ナレバ何ナ
レハ今此ノ事多ヲ機トシタルモノ、方案ナリトテ事情ニ通スルモノ、推測スル所、
據シバ彼等ハ旧訓練隊ト共謀シテ極靜穩ニ造作^{ゾウサ}ナク王宮ヲ占領スル積
リナリシトノヲナシバ外國人等モ之ニ加担スルヲ甚ヒク掛念シタリトモ思ハレズ。兎
ニ角爾後ノ景況ハ極メテ靜謐ナレバ此上充分慎重ヲ加ヘテ委ニク事ヲ
ヲ調査シ更ニ電報スベシ

秘

電報

五月廿八日午後五時二十分京城發
八八七時三十分着

李範晉首領トナリ壯士ノ一羣(曩ノ平壤訓練隊ノ
大隊長リドウテツ、舊侍衛隊士官等三十名ナリ)
親衛隊ノ兵營(之ニハ舊侍衛隊ヨリ編入セシモノ而已)
ニ押入り(舊侍衛隊ヨリ入リタル士官ニ内應セシモノ
アリ)士官ヲ脅迫シ此ニ營ノ兵ヲ率ヒ宮城ニ
闖入セントセシモ其目的ヲ達セザルノミナラズ壯士
五人(此内ニドウテツアリ)捕縛セラレタリ此ノ事變
ニ外國人モ關係セシ事明カナレバ慥ナル證據
ヲ得ルマデハ秘密ニサス

田村申佐

川上中將

秘

電報

十一月二十八日午後六時三十分京城發
午後九時八分 着

海軍部第三九號
十一月二十九日

昨在又王城ニハ要アリ其顛末天略左ノ如シ
昨夜半過李道轍ナル者(旧第三大隊長)ハ朝鮮駐
三十名ヲ引率シ親衛兵(本ノ侍衛隊)營ニ押掛ケ之
ヲ強迫シテ連レ出シ大關ノシニセイ門ニ押掛ケ同門ヲ
打破リ又堀ヲ越ヘ凡ソ百五十名内ニ押入リシニ王城警
衛ノ親衛兵ハ一先ツ退キ兵ハ四ハ隊ニ増シ散兵ニ開
キテ押入リシ無徒ヲ取囲ミ右李道轍及中隊長
ニ名兵五名壯士四名ヲ捕縛セシメ後ハ散シ然レ
去リ大事ニ至ラズレテ事済ミトナレリ右ハ現内閣大臣以
下十名許リ暗殺セントノ計画ナリシト
一説ニ王城警衛兵ノ内ヨリモ之ニ應スル密約ナリシモ其

約ヲ歸スニ却テ撃退シタリト故ニ斯クハ脆ク破レルモノナリト

首謀者ハ現場ニ見ハサレモ外國公使館ニ隠レ居ル

李範晋其他ノ者ナリト

今更ハ日弁ノ關係シタル者ナリ

安細ハ取調上ニ譲ル

京城

伊東金澤軍ヲ令部長
新網海軍少佐

電受第二九二号ノ其年十月

廿八日午後五時五分発
廿九日午前〇時三十分着

西園寺外務大臣

内田領事

今朝ノ王城事変ハ今シ當地居留歐米人ノ一部ト當國人トノ共謀ニ
出テタルモノニシテ本邦人ニハ毫モ關係ナシ本件ニ關シ外國人中疑フヘキ
形跡アル者ハ「アングアウツド」ノ外米國宣教師「エビソン」ハッバア「ド」ノ二
名及「セネラル」ダイ「ナリー」又本日午前一時頃、暴徒等王宮ヘ乱入ノ際王
宮ノ東門外即チケン「ユニ」門外ニ於テ或ハ外國水兵二十名許リ群集シ
居リタリトノ「ナリ」米國公使及ヒ露國公使モ亦此ノ計畫ヲ默認ス
クハ教唆シタルヤノ疑ヒアリ



電報

十月二十九日

午前十時三十分 京城発

疑ヒアルハゼ子ラールルダイ米國宣教師三米公使館書
 記官「アーレン」魯國公使館員ナリ。○「ダイ」ハ隱
 謀ノ計畫者ニテ及間者ニ依テ其事明ガナリ。○
 宣教師ハ事變前王宮ニ入り事ノ起ラレトスルヤ
 國王、室ニ入り今回事ハ朝鮮人ノミ、コトナレハ配
 スル。及バス安心アレト奏上シ平氣ニナリ居レリ。○
 魯米公使館員、事ハ李範晋ヨリ大隊長ニ送リシ
 手紙、内ニアリ。○水兵王城ノ周圍ニ示威運動セ
 シ説アリ。信偽分ラズ取調中

田村中佐

川上中将



電報

十月廿九日午後

ハ時十分京城発
九時廿七分 着

廿六日以来、景況郵便ニテ送レリ。其後ハ先ツ
無事。○李鈺晋ヨリ大隊長ニ送リシ密書日ノ
内ニハ魯国公使モ隱謀ヲ知リ居ルヲアリ。○米
国宣教師「アングラウインド」ハ今ヨリ凡ソ一週前
宮内、奸賊ヲ退クル依頼ノ親書ヲ得シ
コトヲ国王ニ迫レリ。国王ハ此事ハ如何セルコト
ナルヤト諒公使ニ問ビタルコトアリトハ説
アリ

川上中將

田村中佐

名称	大山 巖文書
標題	韓国駐劄軍報告 明治四十年七月~四十三年 3点

分類 番号	
	57-(10)止

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

秘

參一第第二五號

明治四十年八月一日
參謀總長



韓國駐劄軍司令官報告

八月一日午前十時三十八分發電
全 日午後六時四十分着

韓國軍隊解隊件ハ三十日夜半韓國皇帝ノ裁可ヲ經テ
今日本職官舎ニ韓國軍隊各隊長ヲ集メ韓國軍部
大臣ヨリ解隊勅諭ノ内容ヲ傳ヘ午前八時之ヲ終リ午前十
時各隊ヲ韓國練兵場ニ集合シテ勅諭ヲ傳ヘ解散セシムル
筈

○京城附近平穩ナリ

秘 參一第第二六號

明治四十年八月二日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月一日午前五時十分發
八月二日午前四時十分發

今朝解隊、詔勅ヲ傳フル、際步兵第一聯隊第一大隊長ハ病床ニアリ、副官代理トシテ列席シ傳達終ル、該副官ハ大隊ニ歸リ病床ニテル大隊長ニ右詔勅ヲ傳フ、大隊長ハ之ヲ聞キ憤慨、余自殺ヲ企テ之カ為メ、全大隊兵卒一同爆發シ、當時在營中、我教官ニ向テ射撃ヲナシ、隣接セル步兵第二聯隊第一大隊雷同シテ爆發シ、我教官ニ射撃ヲ加ヘ、且ツ兵營外ニ出テントシ、反抗ヲ計ルヲ以テ、午前九時、我步兵第五十一聯隊第三大隊（一中隊欠）ト二小隊ニ兵將校以下十名及機關銃三門ヲ付シ、之ヲ鎮壓



セシム該隊ハ午前九時三十分鐘至ニ從事ニ火力ヲ以テ午
前十時五十分先ッ韓國歩兵第二聯隊第一大隊兵營ヲ
續テ午前十一時四十分全第一聯隊第一大隊兵營ヲ占領
シ韓國兵ハ一部ハ武器ヲ携帶セル俟多クハ武器ヲ捨テ
逃走セリ大隊ハ續テ敗残兵ヲ掃討中ナリ○右ノ外歩兵
三大隊、騎、砲、工兵中隊及研成學校、教導歩兵隊
皆無事解散終ル○我戰死歩兵大尉梶原義久、
全特務曹長並カオ次リ、重傷全特務曹長並カオ次リ
作、輕傷歩兵少尉以藤江伊三太郎、其他下士卒死
傷約二十

秘

參一發第二十七號

明治四十年八月二日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

明治四十年八月二日午後一時至五時
全二日午前十一時十分

一、爾後京城附近、騷亂、鎮定、歸シ我兵及憲兵、巡查、銳意、搜索、
兵、掃討中、シテ明日ヨリハ城外稍々遠巨、村落、搜索ヲ行ハ
トス

二、午後八時迄、得タル報告ニ依レハ本日、戦斗ニ於テ我軍下士以下戰
死者二、負傷十五ニシテ韓國軍ニ於テハ死者將校十一、下士以下五
十四、負傷將校五、下士以下五十四外、外國宣教師、收容セルモノ下
士以下負傷者二十九ニシテ此數ハ尚増加見込アリ其他將校十五
下士以下約三〇人(?)ヲ捕ヘタリ

三、我軍消費彈藥ハ銃彈六千八百六十三機關銃彈千百三十八トス
四、地方鎮衛隊中不穩ノ患アルモノハ成ルハ、平和的文涉ヲ以テ其隊

内現在彈藥亦日本守備隊ニテ保管スルノ手段ヲ採リ、アリ
且ツ漸次解隊ヲ實施スル為メ各鎮衛隊長及日本側教官ヲ
京城ニ召集シ明日ヨリ解隊ノ詔勅ヲ傳ヘ尚實施ニ關スル詳細
ノ指示ヲ爲サントス

秘

參一發第二八號

明治四十年八月二日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月二日午前十一時三十三分發電
同日午後三時三十五分著

昨夜未平穩ニシテ逃竄韓兵ハ殆ント其影ヲ絶
テリ尙ホ引續キ搜索中今朝ニ至リ韓兵ノ屍体
四ツ發見シ七名ヲ捕フ

秘

參一發第二九號

明治四十年八月三日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月二日 午後十時 發電
八月三日 午前二時 十五分 發

今朝來京城及附近村落ニ一般ニ靜穩ナリ。今日夕刻マテ
ニ得タル報告ニヨレハ韓國兵ノ死者准士官以上十二、下士卒五十
六、負傷將校以下五十八、外國宣教師ノ收容セル負傷者三十二ニ
シテ我軍ニ捕ハレタルモ、將校以下五百十六ニ達シ尙ホ若干増加
ノ見込ナリ、戰鬪ノ結果押収シタル兵器ノ主ナルモノハ三十年式步
兵銃千五百十二同銃劍千三百七十七同彈藥一千八百九百七十一單
發銃百三十九同銃劍百二十七、軍刀十八ニシテ是又多少増加ノ見
込ナリ、我消費彈藥小銃 彈 七千五百七十三機關銃彈千
百三十八、黃色藥（手投爆藥ニ使用シモノ千六百グラム）、一昨日
（？）京城ニ招致セル步兵一大隊（大隊欠）ハ本日夕龍山ニ歸
還セシメタリ、地方鎮衛隊ハ明日頃ヨリ逐次解隊ノ豫定



秘

參一發第三〇號

明治四十年八月三日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月三日午前十一時三十分發電
同日午後八時三十分着

京城附近平穩ナリ

負傷者中韓國將校ハ同國衛生部ニ引渡シ下士以下ハ依然我
衛生部ニ預リ捕縛者ハ全部名義上韓國軍部ニ引渡シ終我
軍隊ニテ監視セリ

昨日夕刻韓國敗竄兵約三百一山驛(京義線上ニ龍山
リ約九里)東方約重ノ部落ニ集マリ漸次鶴峴(?)ニ山里東

北方約二里)方向ニ移リ韓民ノ財物ヲ掠奪スルノ報ニ接シ步兵
第四十七聯隊ノ中隊ヲ派遣セリ此中隊ハ今三日前〇時四十
分龍山驛發車同一時三十六分一山下車シ鶴峴(?)ニ向ヒタ
リ

秘

參一發第三一號

明治四十年八月四日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月三日午後九時二十五分發電
同日午前四時五十五分着

京城附近異狀ナシ昨夜一山之派遣セシ歩第四七ノ一中
隊ハ本日前二時崔峴(?)ニ達シ同地附近ヲ偵察セシ
モ異狀ナシ依リテ之ニ引上ラ命セリ水原ノ韓國鎮衛
隊ハ本日午後五時無事解隊セリ穩和ノ手段ニ依リ
韓國鎮衛隊ノ彈藥ヲ我守備隊ニテ保管シタル地方
次ノ如シ

清州、大邱、海州、開城、黃州、平壤、安州、義州、北
青、統營、江界

韓國軍隊ノ馬匹、兵器、彈藥、被服、糧食、陣營具
等ハ日韓兩國將校同相當官ヲ委員トシテ整理
ニ任セリ



秘

參一發第三二號

明治四十年八月四日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月四日午前九時發電
午後一時四十分着

京城附近異狀ナシ

大邱ノ韓國鎮衛隊ハ昨夜我守備隊ニ其兵器

ヲ渡セリ本日解隊セシム

秘

參一發第三三號

明治四十年八月五日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月四日午後九時三十五分發電
同日午後十一時五十分着

京城附近一般靜穩

今日前十一時清州鎮衛隊（分遣兵四三ヲ除ク）及黃州
鎮衛隊ハ無事解散シ昨日武器ヲ我守備隊ニ交附
シタリ。大邱鎮衛隊ハ後二時三十分解散式ヲ終レリ
一山方向ニ派遣セル歩兵一中隊ハ前八時三十分無事龍
山ニ歸着ス

歩兵第四^{一四}第七ノ第五中隊（一小隊欠）ハ昨三日午前八時
大田ヲ發シ清州守備隊ニ増加ス（報告延着）該隊
ハ清州鎮衛隊解散後ノ整理終レハ原隊ニ復歸セ
シムル豫定

忠州守備隊長ニ、宮少尉今日後四時四十分下士
卒十九名ヲ率ヒ原州方向偵察ノ為、出發セリ





參二發第三四號

明治四十年八月五日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月五日午後十時三十分發電
全日午後二時三十分發

京城附近一般安靜穩十リ



秘

參一發第三五號

參謀總長

明治四十年八月六日

韓國駐劄軍司令官報告

八月五日午後十時 發電
全 全 十一時五十分看

狀況平穩ナリ。各地鎮衛隊ハ解隊實施中ナリ

秘

參一發第三六號

明治四十年八月六日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月六日午前十時四十分發
八月六日午後一時五十分著

情況平穩ナリ 昨五日正午安城鎮衛隊ノ解隊ヲ

終ル



秘

參一發第三七號

明治四十年八月二日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月六日午後九時五十分發
八月七日午前零時五十分著

平壤鎮衛隊ハ六日午前八時、海州鎮衛隊ハ同十一時四十
五分無事解隊ヲ終ル。原州鎮衛大隊長ハ去ル三日
上京ノ途中暴徒ノ爲メ捕ヘラレシモ同夜脱出目下
行衛不明ナリ。○忠州警務顧問支那ヨリ二官少尉ノ
率エル偵察隊ハ昨日午後三時原州西方高地附近ニ
於テ韓兵約二百五十ト暴民ノ集團ニ遭遇シ約二時
間交戦、後我居留民ヲ收容シ忠州ニ向テ歸還中ナリト
ノ通報ニ接シ明七日大隊長ニ歩兵二中隊上兵十四名
間銃四挺ヲ附シ原州ニ派遣シ以テ其附近暴徒
鎮定ニ任シ一面鎮衛大隊ノ解隊ヲ援助セシム該
十日原州著、豫定



參一發第五八號

明治四十年八月七日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月七日午前十一時五分發電
同 日午後一時五十分着

京城附近平穩、公州鎮衛隊ハ六日午後七時三十分
解散ヲ終ル、忠州ヲ發シ原州ニ到リ韓國敗竄兵
及暴民ト遭遇交戦セシ二官少尉ノ偵察隊ハ六
日午後八時頃居留官民ト共ニ無事忠州ニ歸着セリ



參一發第三九號

明治四十年八月八日

參 謀 總 長

韓國駐劄軍司令官報告

八月七日午後九時二十分發電
同月八日午前零時三十分着

一 京城附近平穩ナリ

二 安州鎮衛隊ハ七日午前七時半解散ヲ終ル

三 鎮衛隊解散ノ為メ七日午前十時五十分大邱守備隊ヨリ歩兵一中隊(一小隊欠)ヲ聞慶及安東ヲ經テ派遣セリ

四 歩兵第十四聯隊第二中隊ヨリ水原ニ派遣中ナリシ小隊ハ七日午後二時原隊ニ復歸ス

右報告ス

參一發第三八號中訂正

貶竄兵ハ叛兵ノ誤

秘
參一發第四〇號

明治四十年八月八日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月八日午前十一時四十分發電
同日午後三時五十分著

京城附近平穩。洪州鎮衛小隊ハ小隊長及卒二名ヲ除キ
其他ハ武器ヲ携ヘ逃走セリ依テ公州奇備隊ヨリ約一小隊
ヲ派遣シ日本教官天神林大尉ト同行セシメ當分談小隊ヲ
同地附近ニ駐セシメントス



秘

參一發第四一號

明治四十年八月九日



參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月八日午後二時五分發電
同日午前零時三十分着

京城附近靜穩。開城鎮衛隊八日午後四時無事

解隊終レリ。全羅南道榮山浦羅州不穩、徴アル

ヲ以テ理事官、請求ニ依リ本浦ヨリ下士以下一五

ヲ同地方面へ派遣セシムト太田守備隊ヨリ報告ア

リ

秘

參一發第四二號

明治四十年八月九日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月九日午前十時四十七分發電
四日午後零時四十五分着

京城附近平穩。今九日午前中守備隊ヨリ有力

ノ一將校并候ヲ南原附近偵察ノ為メ出セリ。

洪州鎮衛隊ノ逃亡兵ハ同小隊長ノ説諭ニ據

リ五日午後十時洪州ニ歸來セリト依リテ天

神林大尉ヲ同地ニ派遣シ解散ヲナシシメント



秘

參一發第四三號

明治四十年八月十日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月九日午後九時五分發電
同日午前一時三十分着

義州鎮衛隊ハ本日無事解散終ル。蔚山鎮
衛隊ノ武器ハ本日我守備隊ニ收容セリ。
京城附近ハ一般ニ靜穩



秘

參一業發第四四号

明治四十年八月十日



參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十日午前十時二十五分
全日午後一時五十七分

光州鎮衛隊ハ昨九日午後八時無事解散

統營(鎮南)鎮衛隊ノ武器ハ昨日午後三時該地冰達

我要塞砲兵ニ領收セリ

去ル三日清州守備隊ニ増カセタル歩第十四聯隊ノ弟五中隊

隊欠ハ昨日太田ニ帰還セリ

秘

參一桑第五。部

明治四十年八月十二日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十二日午前八時三十分發
日午後二時。分發

昨十一日江華島暴徒鎮定、爲之撤退、
少佐一部隊八同、日午後四時半上陸、先遣小隊八既、
十日午前八時江華府、占領セリ、暴徒ハ四散シ、目下

行衛不聞

解除

鎮衛隊昨十一日午後一時無事

統營鎮衛隊ハ解散、爲メ昨十一日大隊本部所在也、

大邱、向ケ出發セシメタルヨリ統營ニ派遣シ、

八該地、將校以下二十一名ヲ殘シ、其他ハ昨夕引揚ケタリ

我要塞砲兵



秘

參一發第五一號

明治四十年八月十二日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十二日午後三時五分發電

江華島小倉大尉ノ報ニヨレバ去十日先遣小隊

戰鬪ノ際ニ於ケル韓國及徒ノ死傷三十ヲ下ラ

ス。居留官民十二アリ内巡查一死し二名負傷

其他、行衛不明同地鎮衛隊長モ行衛不明ニ

シテ武器彈藥ヲ携ヘ逃走セシモノ韓兵ヲ俘セ

六百以上アリト。十日午後十一時三十分洪州鎮

衛隊ノ解散ヲ了ル



秘
參一發第五二號

韓國駐劄軍司令官報告

參謀總長

明治四十年八月十三日

八月十三日 午後九時四十五分發電
同日 午後十二時五十九分着

江華島派遣隊ハ韓國警務顧問部ニ於テ施行ス
ル同島及兵及ヒ暴民ノ檢舉並ニ小倉大尉ノ施行
スル該地鎮衛隊兵器被服等、整理ヲ援助セシムル為
メ歩兵一中隊ヲ殘置シ他ハ現守備地ニ歸還セシム
原



秘

參一發第五三號

明治四十年八月十三日



參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十三日午前十一時四十分發電

統營

(鎮南)

鎮營隊

八十三日午前二時

タイコウ(大

邱?)

無事解散了ル

江華府城内ニ

武器彈藥ヲ

携ハタル

暴徒潜伏

ニアリ是レカ檢禁中ナリ

京城附近靜穩

參一發第五四号

明治四十年八月十四日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十音午後九時分發電

原洲派遣隊ハ當分該地附近駐、橫城、安興、平山
附近暴徒ノ情况ノ偵察シ要ムルハ鎮壓ニ任セ云
江華島ノ派遣隊ハ步兵一中隊ヲ殘シ其他ハ本
原隊ニ復歸セリ



秘
參一癸卯五五号

韓國駐劄軍司令官報告
昨夜來各地吳新報ヲ得ズ
京城附近ハ靜穩

參
謀
總
長

明治四十年八月十四日

八月十四日

午前十一時廿一分癸電
午後三時署



参一癸第五大号

明治四十年八月十五日

参謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月

十四午後九時四十分發電
十五午前一時三十分着

全列鎮衛隊ハ十四午前八時四十分無事解隊ヲ終ル○江陵

派遣中隊ハ軍艦島域ニ乗船シ十三午前九時海軍陸

戦隊ト共ニ南大川河口ニ上陸ス江陵ヲ占領ス○江

陵附近平穩ナルモ珍富驛(江陵西方約十里)大和驛平

昌郡ニハ暴徒アリ又江陵岩本警部ノ言ニ依レハ去三

日卸便運送夫大和驛ニテ五日卸便受取所負二平昌

驛ニテ殺カルト中隊ハ今十四日未明出奔珍富驛ニ前進

シタル筈



秘

參一發第五七號

明治四十年八月十五日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十五日午前七時二十五分發
同日午後三時三十分著

情報：依レハ原州東方平昌、忠州東方清風堤川及原州

西方驪州、忠州西方竹山附近ニハ暴徒出沒ノ模様アリ

リ目下偵察中ナリ

全州南方南原鎮衛隊八十四日午後八時十五分解散

ヲ終ル

秘

參一發

參謀總長

昭和十四年八月十六日

韓國駐劄軍司令官報告

同 十六日 午前九時五十分發
十六日 午前一時一六分著

一、京城附近平穩ナリ

二、太田、西南約二里ニ在ル(シテ)韓兵ヲ雜スル暴徒

起リ、ト、報ニヨリ太田守備隊、步兵一中隊ヲ同

地ニテ行軍セシム



秘

參一發第五九号

明治四十年八月十六日



參謀總長

韓国駐劄軍司令官報告

八月十六日午前十一時三分發電
同日午後六時五分著

忠州守備隊増加ノ為メ中隊長ノ指揮スル歩兵
一小隊ハ今午前八時京城ヲ出發ス該隊ハ
示威ノ目的ヲ以テ特ニ廣州利川、インチクカ(?)
經テ忠州ニ至ラシム○十五日午後水原守備隊ヨ
リ將校ノ指揮スル下士以下十名ヲ竹山ニ派遣
シ當分該地ニ在テ警戒ニ任セシム○地方分遣
隊ト連絡ハ左ノ方法ニ依レリ

江華島、仁川間毎日一回運輸部小蒸汽船ニ依ル

元山、江凌間特ニ傭入レタル小蒸汽ヲ用ユ

原州、忠州間朝鮮馬ヲ使用シ歩兵ヲ以テ
通騎ヲ設ク

秘

參一發第六十號

明治四十年八月十七日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十六日午後九時五十分發電
同日午前十時十三分著

一、十五日午前二時頃我兵卒一名江華城南門於
テ前哨勤務中韓兵三名ノ狙撃ニヨリ輕傷ヲ受
ケ守備隊長ハ直ニ特務曹長以下十名ノ斥候ヲ派
遣シ其二名ヲ射殺シ一名ハ逃走ス同嶋ニ於テ十
五日正午迄ニ我軍押收シタル銃器約五百挺
二、末安中尉ノ偵察隊ハ十五日午後六時忠清道堤川

ニ於テ韓兵百五十暴徒六十ト衝突シ四時間交戦
セリト

此項ハ電文簡ニシテ意ヲ盡サズ明リ次第細報ス



秘

參一發第六一號

參謀總長

明治四十年八月十七日

韓國駐劄軍司令官報告

八月十七日午前十時十分發
同日午後四時十分發

十六日午後十時四十分蔚山鎮衛隊ノ解散ヲ終ル
京城附近平穩ニシテ地方ニ関シ其後新報ヲ得ズ



秘
參一發第六二號

明治四十年八月十八日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十七日午後九時四十分發電
八月十八日午前七時十分發電

忠州守備隊長ノ報ニ依ルハ末重安^{中尉}偵察隊八十五日午後
六時堤川ニテ韓兵百五十義兵二百ト衝突ニ一時是ヲ擊退シ
タルモ夜ニ入り包圍ヲ受ケ西南高地ニ引上ケ十七日午前九時忠
州ニ着ス員傷卒一

江原道並ニ忠清北道暴徒鎮壓ノ為メ步兵第五十一聯
隊附足立中佐ノ指揮スル步兵三中隊、騎兵十二、兵一小
隊^{（附隊）}統^{（附隊）}四^{（附隊）}十八日午前六時三十分京城奔列陣^{（附隊）}ニ鳥
致院^{（附隊）}先^{（附隊）}忠州^{（附隊）}至ラシム忠州到着後駐劄忠州
守備隊原州下林支隊及ヒ為^{（附隊）}得^{（附隊）}江校^{（附隊）}派^{（附隊）}兵
兵第五十聯隊、中隊ヲモ併セ指揮セシムル等

大邱ヨリ安東方面ニ派遣シタル步兵第十四聯隊、一中隊（示
隊^{（附隊）}）ハ當分安東ニ留メ為^{（附隊）}得^{（附隊）}采川（安東、北方）ニ前
進シ又^{（附隊）}春川守備隊ニ步兵一小隊ヲ増加シ中隊長ノ指
揮トシ一部ヲ洪川ニ出シ足立支隊ト相應ニ動作セシム



秘

參一發第六三號

明治四十年八月十八日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十八日午前九時四十六分發電
八月十八日午前十時四十七分發

末安中尉、偵察隊ニ於テ行衛不明三名アリ

足立支隊及ヒ春川増加小隊ハ豫定ノ通り本朝出發

セリ

康津(光洲ノ南約二十里)鎮衛隊昨日無事解散セリ



秘

參一發第六四號

韓國駐劄軍司令官報告

京城附近平穩○地方情況聞新報得久

參謀總長

明治四十年八月十九日

八月十八日午後九時三十分發電
八月十八日午後十一時三十分發電

秘

參一發第六五號

明治四十年八月十九日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十九日 午前十一時三十分發電
午後二時廿六分着

足立支隊ハ十八日午前十一時鳥致院停車場ニ着ス
同日清州ニ前進スル筈
地方情況ニ関シ新報ヲ得ス

訂正

參一發第六二號中左ノ如ク訂正ス

第一行「忠洲」ハ「忠州」以下全シ

同「未吉(安カ)」ハ「未安」

第八行「鳥致院」ノ下「(公州東北方)」ヲ入ル

同「駐劄」ハ「中佐」

第九行「派シ」ハ「派シアル」

參一發第六六號

明治四十年八月二十日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十九日午後九時三十分發
八月二十日午前七時五十分著

一 足立支隊ハ昨夜清州ニ宿營セリ明二十日忠州到着ノ豫定
二 原州下林支隊ヨリ派遣セル偵察隊(佐藤大尉ノ率ノ二小隊)ハ十六日平昌ニ著シ其午後同夜芳林驛(平昌北方)ニ於テ江陵派遣中隊ノ斥候ト連絡セリ偵察隊ハ今十九日原州ニ歸還スル豫定

三 平昌附近ヲ中心トセシ暴徒ハ漸次南方ニ移動シ其主力ハ目下寧越堤川附近ニアルモノ如シ

四 從來派遣セル諸隊ト共ニ暴徒ヲ包圍スル目的ヲ以テ元山ヨリ東ニ步兵一中隊ヲ派遣シ三陟(江陵東南十里)附近ニ上陸ノ後テ旌善附近ニ前進セシメ又安東

ニアル步兵第十四聯隊第十一中隊(二小隊欠)ニハ主力ヲ以テ榮川ニ前進シ一部ヲ古直嶺(榮川東北方七里)ニ派遣スヘク命セリ

五 安東鎮衛隊ハ十六日無事解散ヲ終ル

六 十二日我憲兵ハ清風(忠州東方五里)ニ於テ賊ノ監視哨ヲ勤ムル土民ハヲ逮捕シ忠州警務廳問支部ニ引渡セリ

是表ニ全州守備隊ヨリ南原ニ派遣セル一小隊ハ十二日全州ニ歸還シ又十五日太田守備隊ヨリ儒城(公州東南五里)ニ派遣セル一中隊ハ該地附近異狀ナキヲ認メ十六日歸還セリ

(右第六項報告延著)

七 十七日迄ニ江華島ニ於テ押收シ仁川ニ送り來レル武

八 器ハ小銃六百十三銃、劍四、梱包彈藥六箱ニ達セリ。
電信線路巡視ノ為メ、忠州守備隊ヨリ工夫ト共ニ派遣
セリ。兵卒六ハ、長湍院（忠州西北九里）ニ於テ暴徒ト衝突シ、人夫二殺サル（衝突時日間合セ中）。

訂正

參一發第五十八號第二項ノ「壽洞」ヲ「儒城」ト訂正ス

參一發第六七號

明治四十年八月二十日



參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月二十日午後一時四十分發電
八月二十日午後四時十分着

蔚山北方慶州、京城北方北漢、鎮衛隊昨十九日解散ヲ終ル

歩兵第四十七聯隊末安中尉偵察隊、行衛不明三名、内二名ハ無事歸還セリ

十六日京城ヲ出發シタル忠州增加隊ハ十八日午後四時

半長湖院ニテ約百五十、暴徒ニ出會シ之ヲ潰乱

セシメタリ此暴徒ハ忠州西北驪州方面ヨリ來リ

長湖院附近、電線ヲ破壊シ長湖院ニ於テ物資

徵發ヲ為セシ由ニテ三十年式銃約十五其他舊式

銃ヲ有セリト

秘

參一發第六八號

明治四十年八月二十日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月二十日午後七時三十分發電
八月二十日午前二時三十分着

步兵第五十聯隊第四中隊機關銃ヲ附人ハ今二十日午後四時

元山發三隊ニ向ノ筈

原州派遣教官古莊大尉ノ報ニ依レハ韓國將校ニ名十二日平

壤附近ニ於テ目下果徒ト連合シアル兵團ヨリ脱走シ十八

日夜原州ニアル鎮衛大隊長ノ許ニ來リ、同將校ノ言ニ依レ

ハ將校ノ大部ハ十二日脱走セシ筈ニテ又下士率ノ家族ノル

モハハ多數脱走セリト



秘

參一發第七。號

明治四十年八月二日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月廿一日午後九時五分發電
同廿二日午前三時二分着

長湖院利川(忠州西方)附近暴徒出沒人々ヲ
以テ次ノ如ク處置ス。水原及ヒ大田守備隊ヨ
リ本日午後所要ノ部隊ヲ出シ右暴徒ヲ
鎮壓ニ任シ原州下林隊ヨリ約一隊ヲ原
州西方驪州ニ出シ第十三師團ヨリ步兵約
一中隊ヲ京城東方楊柳ニ出シ共ニ同地附
近ノ暴徒ヲ掃蕩セシム特ニ楊柳附近ニ出シ
ノル中隊ハ成シ得レバ利川(京城東南方)

附近ニ進出シテ大田ヨリ前進スル討伐隊ト
協カシ驪州ニ至ル小隊ハ當分同地ニ停止

在平壤步兵第四十七聯隊本部及ニ隊長
ノ指揮スル二中隊ヲ龍山ニ召致シ南浦守
備隊司令官依田少將ノ指揮下ニ入ル警守
足立支隊ハ道路峠嶺惡ノ爲メ一日遅ク其
日忠州着ノ豫定歩兵第五十一聯隊ノ兵廿
卒一日射病ノ爲メ死ス

參一發第七十一號

明治四十年八月二十二日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月廿二日午後〇時三十分發
同日同一時三十分著

足立中佐ノ報ニ依レハ暴徒ノ重ナルモ、堤川及ヒ
寧越附近ニ在ル如ク清風以東及以北ノ諸村落
ハ人民概シテ暴徒ニ與セル徵アリ依テ該支隊ハ
二十三日歩兵一小隊ヲ長湖院ニ出シ水原ヨリ出
タル隊ト協力セシメ支隊ノ主力ハ二部ニ分レ
二十三日拂曉清風并ニ堤川ノ暴徒ヲ討伐スル
筈

大田ヨリ出シタル討伐隊及ヒ水原ヨリ出シタル
討伐隊ハ共ニ二十一日午後五時ト四時ノ間ニ
於テ各守備地ヲ出發シ楊根ニ至ル中隊ハ

二十二日午前六時京城ヲ出發セリ

參一發第七二號

明治四十年八月廿三日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月廿二日午後五時五十分發電
廿三日午前三時五十分著

一第十三師團ヨリ利川方向ニ出シタル騎兵將校作
候昨二十一日午前九時十分廣川ニ達シ韓國火
藥庫ニ武器庫四ヲ發見シ是ヲ爆發或ハ燒棄
シタリ同將校斥候ハ同日午後四時三十分同地發
利川方向ニ前進セリ

二三陟派遣中隊ハ昨二十一日午後五時下洞ニ上陸シ
六時半三陟ヲ占領ス賊約四十八二十日三陟ニ來
郡主事ヲ縛シ良民ヲ害シ兵器彈藥ヲ掠奪

ニ旌善方向ニ遁走セルヲ以テ中隊ハ直ニ一部ヲ以テ
追撃シ其餘ハ今二十二日旌善ニ前進セシムル筈
三江陵ヨリ以南秋川津ニ至ル間平穩三陟附近ノ土民
賊ニ與ヒテ援練ナレ

江陵派遣隊ノ報告ニ依リハ十六日珍富大里間各部落土
民ハ牛馬ヲ率連シ遁走セリ大里ニテ暴徒十名ヲ斃殺シ
火繩銃一彈藥八十ヲ得タリ芳林洞ニ至リ附近ニハ義
兵四百アリ内百五十八騎兵タルヲ如シト午後八時下林
支隊ハ出セル偵察隊ト芳林洞ニテ連絡セリ十七日大
和ノ土民總テ遁走セリ中隊ハ十九日午後十時江陵
ニ歸還ス此際襄陽ヨリ避難セル巡檢ノ言ニ依リ

賊約百十九日午前六時頃麟蹄縣方向ヨリ来リ襄陽邑内ニ放火スリ其進行方向不明依テ二十一日午後四時襄陽ニ同隊ヨリ偵察隊ヲ出スリ

秘

參一發第七十三號

明治四十年八月二十三日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月二十三日午前十時五十分發電
午後二時三十分着

目下報告スヘキ事項ナシ

秘

參一發第七十四號

明治四十年八月二十四日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月二十三日午後十時十分發電
二十四日午前二時着

一、京城附近平穩ナリ

二、江界ニアル鎮衛隊ハ二十三日午前解散終ル

三、歩兵第四十七聯隊本部及第二大隊ハ二中隊欠ハ二十

三日午後五時十分龍山ニ到着

四、二十三日午後一時十分及同六時五十五分發忠州守備

隊長ノ報告ニ依ルハ暴徒約二百堤川方向ヨリ忠州ニ

來襲シ守備隊之ヲ撃退セリ又山砲一ヲ有スル約一

百ノ暴徒清風方向ヨリ來リ忠州ノ東方二十米突ニ

アル村落ヲ占領シ頑強ニ抵抗セシモ約一時間戦闘ノ

後之ヲ撃退セリ該暴徒ハ清風方向ニ退却セリ其死

傷少クモ二十名以上アリシモ、如シ我隊ハ負傷一

ル

右報告ス

受ケ之ニ應射セシカ暴徒益々増加、徴ヲ認メ午後六
時貴川ヲ燒毀シ八堂里（京城東方）ニ歸還セリ二十
八日更ニ前進偵察ヲ為スト
第十三師團ヨリ二十八日中隊長ノ指揮スル歩兵約百
ヲ京城ヨリ出發セシメ高安附近ニ派遣シ同地對岸
ノ暴徒ヲ討伐セシム
又廣州附近ノ暴徒ヲ掃蕩シ且ツ電信修理ノ工夫ヲ
掩護スル為メ二十八日京城出發歩兵一小隊ヲ廣州利
川方向ニ派遣セリ
慶尚南道咸陽鎮衛隊ハ二十六日午後二時無事解
散ス

訂正

參一發第六二六三六五六六六九七〇七一一七七七八七九
八二號中「足立支隊（若クハ中佐）」ハ「足達支隊（若クハ
中佐）」ト訂正ス

秘

參一發第八四號

明治四十年八月十八日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月十八日午後一時五十分發
同日午後四時五十分着

忠州附近ニ於テ敗レタル暴徒ノ主ナルモノハ心項峴(忠州
東方一里)ヨリ二部ニ分レハ丹陽(忠州東南方)方
向ニハ東北方ニ進レタリト足達支隊ノ主力ハ二十四
日堤川南方約三里ノ地ニ於テ十四五名ノ暴徒ト遭
遇シ之ヲ擊退シテ其一名ヲ殺シ尚ホ途中若干ノ暴
徒ヲ潰亂セシメソ、丹陽ニ前進シ他ノ步兵一中隊ハ
堤川附近ニ在リテ偵察竝ニ後方聯絡ニ任シ其將校
乍候ハ堤川西北三里ノ地ニ於テ五六名ノ暴徒ヲ發
見シ一名ヲ殲セリ
原州下林支隊ヨリ藥水(原州東方)ニ出シタル步

兵中隊ハ二十三日平昌ヲ占領シ道頓里(藥水南方)
及平安(藥水東方)方向ヲ搜索セシモ得ル所ナク土
人ノ言ニ依リハ平昌道頓里附近ノ暴徒ハ去ル十六日
以來何レシカ去リタリト同隊ハ麻瑤洞(平昌南方)
附近ニ到リ旌善及平昌兩街道ヲ扼シ足達支隊ノ
主力ト協同動作スル筈

八月十八日報告ノ末安ハ隊ノ行衛不明者兵卒大野
林平ノ屍體ヲ堤川ニ於テ發見セリ

第十三師團ヨリ楊根ニ出シタル步兵討伐中隊ノ聯
絡ノ為ノ高安(京城東方)ニ位置シタル騎兵將校
乍候ハ對岸ニ在ル約二百ノ暴徒我ノ河岸ニ在ル
渡船ノ集収中ナリシヲ以テ偵察ノ為ノ貴川南方渡
船場ニ向ヒ前進中對岸ヨリ約五十ノ銃數ノ射撃ヲ

秘

參一發第八五號

明治四十年八月二十九日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月二十九日午後九時四十分着
同日三十九日午前一時三十分着

黃州守備隊（步兵第四十七聯隊第七中隊）八步兵第五
十二聯隊一中隊（一小隊缺）ト交代シ龍山ニ到リ南
部守備隊ニ増加セシム

步兵第四十七聯隊ヨリ出シアル鎮南浦守備小隊ヲ步兵
第五十二聯隊ノ一小隊ト又定州守備中隊ヲ安州守備
中隊ノ一小隊ト交代セシメ凡テ所屬大隊ニ合シ平壤
ニ集結セシム此ノ平壤ニアル步兵第四十七聯隊ノ大隊ハ
不日龍山ニ召致シ目下京城ニアル步兵第五十二聯隊ノ
大隊ヲ平壤ニ歸還セシム豫定

本日在京城咸興憲兵隊及輜重隊共解散終ル



秘

參一發第九〇號

明治四十年八月三十日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月三十日午後零時四十分發電
日午後六時十分着

一、慶尚北道順興、豐基附近、二十七日午後四時頃暴徒約四百ト衝突シタル西岡大尉、部隊ハ廿八日午後零時三十分ニ至ル迄戰鬪ヲ繼續シ遂ニ暴徒ヲ擊退シ暴徒ハ西方、山嶺ヲ越、忠清北道ニ敗退セリ賊ノ死傷詳ナラズ我ニ損害ナシ

二、黃州守備隊タリシ歩兵第四十七聯隊ノ第七中隊ハ在平壤歩兵第五十二聯隊ノ一中隊（一小隊欠）ト交代シ昨三十日午後九時十四分龍山ニ到着南部守備隊司令官ノ令下ニ入ル

三、昨三十日暴徒約三百忠州西南方槐山ヲ襲ヒ同地ニ在リシ我歩兵一分隊同日午後五時半忠州ニ引揚來ル由テ直ニ中隊長ノ指揮スル歩兵二小隊ヲ討伐ノ為派遣ス

四、昨三十日驪川南方ニ於テ我歩兵小隊ト戰鬪シ暴徒ノ死傷ハ士民ノ言ニヨリハ十餘名ヲ下ラサルモノ、如ク又同小隊ノ墮セシ韓國將校ハ京城侍衛歩兵聯隊逃亡將校ナルカ如シ

參一發第九一號

明治四十年九月一日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

八月三日午後九時四十分發電
九月一日午前三時四十分著

八月十五日京城發糧秣護衛ノ為、忠州ニ向ヒル歩兵第五十一聯隊、軍曹
以下六名、二十日長湖院東南方約一里半村落ニ於テ約三百ノ暴徒ニ包
圍セラレシモ之ヲ擊退シテ無事忠州ニ到着セリ又全軍曹ハ忠州ニ兵卒
一名加ヘ七名以テ二十一日忠州出發漢江ヲ下リ龍山ニ至ル舟ニ便乘シ歸途
就中二十三日夜間ハ流約百里ニテ梨南附近ニ於テ兩岸ヨリ猛射ヲ
受テ卒一〇名被シテ死シタル者有リ又二十三日忠州ニ歸リ格闘シテ其
十餘名ヲ殺シ、其ノ餘ハ逃去シ、以テ二十日驪州ニ着シ全地
守備隊ハ二十三日ハ無事ニ歸リ、二十三日ハ影ヲ認メ由テ守備隊ト
分レテ二十三日ハ無事ニ歸リ、二十三日ハ影ヲ認メ由テ守備隊ト

二十七日楊根方面賊徒剽計ニ出シ、歩兵第五十二聯隊ニ中隊二十八日
廣灘ニ達シ附近山中賊ノルヲ謀知シ二十九日夜十二時出發シ三十日其北方
山中各所ニ於テ少許ノ賊ヲ討テ全日廣灘ニ歸還ス此日遭遇シ賊ノ數
約二百ニテ其百ヲ殲シ我兵負傷一又全中隊ハ春川派遣中隊ヨリ楊
德院ニ出シ小隊ト確實ニ連絡セリ此附近一般ニ平穩ナリ又高安ニ派
遣シタル中隊ヨリ出シ騎兵介候ハ二十九日廣灘ニ於テ楊根附近剽計



隊^ト連絡セリ

三槐山ニ派遣シタル中隊ハ本日午前三時三十分槐山ニ達シ露營中賊ヲ

奇襲シ潰敗セシム其賊約三百ニシテ彼ハ周章狼狽武器彈藥

ヲ放棄シ陰城、清州方面ニ走レリ賊ノ死屍發見セルモノ三十我ニ死

傷ナシ

秘

參一發第九二號

明治四十年九月一日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

九月一日午前十一時發電
午後三時廿五分着

報告スヘキ事ナシ



參一發第九三號

明治四十年九月二日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

九月一日午後九時五十九分電
同日午前一時十分着

一、今朝報告後情況異狀ナシ

二、韓國宮内府ニ於テ貯存シアリタル「マキシム」式七珊知半

速射山砲四門及彈藥其他ノ材料ヲ以テ在京城野

戰砲兵第十九聯隊第二中隊ノ人馬ニテ臨時山砲中

隊ヲ編成セリ詳細ノ報告ハ郵送ス

秘

參一發第九八號

明治四十年九月四日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

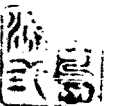
九月四日午前十一時十五分發
同日午後一時十五分着

全義附近ノ暴徒討伐為昨三日午後烏致院ヲ發シ

タル歩兵小隊同日天安停車場ニ下車シ并川場（天

安東南約三里）方向ニ前進セリ

其他新報ヲ得ス



秘

參一發第九九號

明治四十年九月四日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

九月四日午後九時三十分發電
同月同日午後五時五十六分着

一春川、京城間ノ電信保護ノ為メ步兵第五十一聯隊ノ一小隊ヲ清平川（京城東方九里）ニ出セリ

一開城及仁川守備隊ヲ步兵第四十七聯隊ノ一小隊宛ト交代セシメ從來ノ守備隊（步兵第十四聯隊ノ第一第四中隊）ヲ竜山ニ招致セリ

一京釜鐵道沿線ノ各地ニ暴徒出沒ノ報頻繁ナルモ軍隊側ヨ

リハ未タ確報ニ接セス但シ主要ナル停車場ニハ今明中ニ警告
察官ヲ派遣スルヲトナレリ

秘

本一發號一〇〇號

明治四十年九月五日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

九月五日午後二時三十分發
同日午後五時二十分有

目下報告不可事項



叅一發第一〇二號

明治四十年九月六日

叅謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

九月五日午後九時四十分發電
同日午前一時三十分着

京城東南十里乃至十五里ナル陽智及附近ニ賊徒集合ノ情報ヲ得之カ討伐トシテ本日午前十時三十分龍山ヨリ赤司少佐ノ率ユル歩兵一中隊ヲ同方面ニ出發セシメタリ

曩ニ楊根方面賊徒討伐ノ爲メ歩兵第五十二聯隊ヨリ派遣シタル歩兵一中隊(明石中隊)ハ本日午後二時京

城ニ歸還ス

秘

參一發第一〇二號

明治四十年九月六日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

九月六日午前十一時發電
同日午後二時着

昨五日利川ニ中隊長ノ率テ步兵一小隊ヲ派遣シ本日步兵一小隊ヲ廣州ニ派遣シ同地附近ノ警備及電線ノ保護ニ任セシム

江華島守備步兵第十四聯隊第二中隊ヲ步兵第四十七聯隊第五中隊ノ一小隊ト交代セシノ所屬隊ニ復歸セシム



秘

參一發第一〇三號

明治四十年九月七日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

九月六日午後十時十五分發電
九月七日前零時三十分着

鎮川(清州北方)暴徒討伐ノ爲メ龍山ヨリ中隊長ノ
指揮スル步兵二小隊安城(成歡驛東北方)暴徒討
伐ノ爲メ成歡ヨリ步兵一小隊何レモ本日出發ス
本日京城元山間ノ電線京城ヲ距ル約五里ノ地ニテ
切斷セラレ之レカ修理護衛ノ爲メ京城步兵第五十一
聯隊ヨリ將校以下半小隊ヲ出ス

平壤ヨリ步兵第四十七聯隊ノ第一大隊本部及第三
第四中隊ヲ本日龍山ニ招致シ南部守備隊司令官
ノ指揮下ニ入ラシム

釜山守備隊步兵第十四聯隊ノ第十中隊(一小隊欠ク)
ハ本日鎮海灣要塞砲兵小隊ト交代大邱ニ歸還ス

參一發第一七七號

明治四十年十月二十二日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告ノ要旨

一南部守備管區ニ於ケル情況

鎮海灣重砲兵大隊ヨリ西方智異山脉方向ニ出シタル二小隊ハ
十七日拂曉盤若峯南麓七佛寺^蘆谷寺附近ニ在リシ約百名ノ賊
ニ會シ之ヲ盤若峯ニ擊退シ賊ノ首魁者ヲ斃セリ賊ノ死傷
約五十

二中部守備管區ニ於ケル情況

利川守備隊ヨリ漢^江沿岸ニ出シタル偵察小隊ハ十八日
興湖(驪州東南約三里)附近ニ於テ約四百ノ暴徒ト交戦シ之ヲ
東方ニ擊退セリ



參一發第一七八號

明治四十年十月二十三日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告ノ要旨

一、南部守備管區ニ於ケル情況

公州ヨリ忠清、全羅境ニ出シタル將校ハ二十日夜
恩津（公州南方約七里）附近ニ於テ暴徒約二十ニ會シ之
ヲ擊退セリ賊ノ死者二、



參一發第一七九號

明治四十年十月廿四日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告ノ要旨

一南部守備管區ニ於ケル情況

其一、永同守備隊ヨリ西方ニ出シタル一部隊ハ十九日高山東北地區ニ於テ暴徒ヲ夜襲シ其五名ヲ生擒セリ

其二、步兵第四十七聯隊ヨリ成歡附近ニ出シタル一小隊ハ二十一日天安東方約二里ノ地ニテ約四十ノ賊ヲ撃退シ之ヲ成歡東方約三里ノ地ニ追撃シ其十五ヲ殪セリ
其三、清州守備隊ヨリ出シタル下士斥候ハ二十二日同地西北約三里金城附近ニテ約六十ノ賊ヲ撃チ其七ヲ殪セリ

共ニ我ニ損害ナシ

參一發第三七六號

明治四十二年三月十六日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告ノ要旨

咸鏡南道方面

倉坪ノ憲兵ハ三月一日永興郡内ニ於テ十二ノ賊ヲ討テリ

全羅南道方面

宝城ノ憲兵ハ三月二十五日同地北方約六里ノ地ニ於テ約二十ノ賊ヲ討テリ

昌平ノ憲兵ハ三月二十六日玉果附近ニ於テ約七十ノ賊ト衝突シ之ヲ潰走セシメタリ

海南ノ憲兵ハ三月二十七日同地東方約二里ノ地

ニ於テ約十四ノ賊ヲ討テリ

木浦ノ憲兵ハ三月二十七日同地東方約四里務安ニ來襲セシ約三十ノ賊ヲ斃キ壊セリ

明治四十二年三月十六日

參謀總長

參謀第九號中左ノ通正誤人

本文第一項中

正

着奉

誤

着奉



參一發第二四號

明治四十三年八月二十二日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告ノ要旨

一、原道北倉憲兵分遣所上等兵二補助員五、八月三日午前四時北倉北方一里半ノ地ニ於テ賊約三十ト衝突、交戦約三十分ニレテ之ヲ金剛山方面ニ撃退セリ

二、平安南道平地院憲兵分遣所上等兵一、外二名ハ八月四日肅川ノ東方約五里ニ於テ賊約十六ト衝突、之ヲ潰走セシム

同道靈山城倉、石隅洞ノ各巡查駐在所巡查三八七月三十一日徳川ノ東南約十里吳江面ニ於テ各自銃器携帶ノ賊約二十三ト衝突、之ヲ潰走セシム

同道高原憲兵分隊ヨリ派遣ノ下士以下五、補助員四、八月七日陽徳郡内ニ於テ賊約二十ト衝突、其一ヲ傷ケ銃一、劍一ヲ鹵獲ス

同道安州守備隊川上少尉以下十五名、八月九日午後四時北倉東南約八里ニ於テ賊十八ト衝突、之ヲ潰走セシメ銃二ヲ鹵獲ス

同道北倉憲兵分遣所上等兵一、補助員二、及徳川守備隊十三名ヨリ成ル連合討伐隊、八月九日徳川ノ東南約十里吳江面ニ於テ賊約二十ト衝突、賊三ヲ傷ケ銃二ヲ鹵獲ス

參謀部二六排

明治四十三年九月十九日

參謀總長

朝鮮駐劄軍司令官報告要旨

一、平安南道三登惠兵分遣所上等兵一補助員六
八月二十八日咸川財務署兵變衛出旅途中三登
西北約三里ノ地ニ於テ賊十二名、鎗擊ヲ受テ死傷約三
十分ノ後之ヲ潰走セシメテリ、賊ノ死體一、火繩銃一ヲ遺
棄セリ

二、江原道土城憲兵分遣所上等兵二補助員二ノ八月十四日

夜土城東北約三里ノ山中ニ於テ焚火中ノ賊十三名ヲ斃
其ニテ遺シ之ヲ潰走セシメテリ

三、咸鏡南道九山守備隊永井中尉以下二十五名八月
二十八日馬轉洞西南約五里ニ於テ賊二十九名ヲ夜襲シ
賊三ヲ傷テ火繩銃一ヲ擄獲セリ

明治四十三年十月二十八日

參謀總長

朝鮮駐劄軍司令官報告要旨

一、京畿道三串里憲兵分遣所捕虜員二十月十七日三串里西方二里於賊二ト衝突之ヲ捕虜員一ト受傷、捕虜員一輕傷ヲ受ケリ

二、慶尚北道才山憲兵分遣所上等兵一補助員二十月十七日泰陽、東方約四里於潛伏中、賊四ト探知之ヲ衝突銃一ト鹵獲セリ

三、忠清南道鬼山場憲兵分遣所上等兵一補助員二十月十七日鬼山場北方一里半於賊三ト衝突一ト逮捕一ト傷ヲ銃一ト鹵獲セリ

四、京畿道麻田憲兵分遣所下士以下五六十員二十月十四日麻田西方約一里於賊七ト衝突之ヲ潰走セシメタリ

五、黃海道德隅場代士憲兵分遣所上等兵一補助員二十月十八日德隅場西方約一里於賊十六ト衝突其一ト殲セリ

六、江原道金城警備署より出ルル郵便車衝突其二十月二十一日午後六時杏亭駐在所南方約一里於賊四十ト衝突銃一ト鹵獲セリ

七、慶尚北道英陽憲兵分隊より出ル連合搜索隊下士以下九名二十月十四日寧海西北約四里於賊十ト衝突其三十ト傷ヲ捕虜員一ト逮捕セリ

八、黃海道溫井院憲兵分遣所上等兵二補助員二十月十六日溫井院東南方約二里於賊約二十ト衝突其一ト捕虜員一ト鹵獲セリ

名称	三浦梧楼文書
標題	韓国要人三浦公使往復書翰 手綴 一綴

分類 番号	123

登録 番号	
----------	--

敬復者昨浣

芝函忻悉壹是敝邦危迫之狀在

閣下局外之見明於局內是之今日情

事所謂一身如蓼蟲不知所苦也裒

癢已甚保護近密亦恐不能堪任遑

暇魚顧他事

歲戒珍重威佩莫名此頌

台社

李昱應頓
我八月二十三日

敬復者次奉

大函擊玩無已呈之本心實與

閣下所戒相符重荷歲規敢不書紳至

另示二節當轉示閣中諸公諒亦無異議

也此頌

勛祺

李是應

頓

我八月二十三日

要項四款
何此編
米道
海
多
遠
矣

是
應
頃

子
若
陳
諸
座

要項四款
何缺漏達
遵無違
矣

李 是 应 扣
不面有望古人多行靈犀一點
而地日然言在不言缺項
効 不 負

又 得

要項四

一太公須應輔翼

大君主專治宮內之事而凡百政務任之于內閣大臣斷不可干預事

謹遵誓文所載將王室事務與國政事

務畫然區別斷不許宮內府之越俎侵

犯政府職權以亂其畛域又無論中外

官員之進退典其他政務

太公毫不得容喙於其間須宜一任之

于內閣大臣何請

大君主款可施行

二以金宏集魚久中金久植三人為初其

在東魚臣才公使食

他忠誠而願釐政之人皆為華用擔任
國政勉聽顧問官所說新行釐政事業
以圖鞏固國家獨立之基礎事
三復任李君載冕于宮內大臣金宗漢于
宮內振辦使之權首宮內事務事
四派李君坡鎔到于日本留學三年以養
成材器事但每年一回以夏季休學之
時歸省無妨

致大院君書

肅啓者、當此確定施政方針、期成

貴國維新宏業、格樓就其尤為切要者、謹
陳管見二節、以備

卹下參揆、卽希

炳鑒為禱、格樓又有切望於

卹下者、將來大小政務、

卹下恪守曾所誓約、概勿與聞、卽照再昨日

上諭、令內閣大臣先議仰請

大君主裁可施行、方為允協、至管見二節、本日

亦向

總理大臣另行規勸矣、為特肅函奉佈、即
希

亮鑒、順頌

崇祉、

子爵三浦梧樓頌首

十月初十日

一博採材能、切勿以黨與名色為嫌也、如果泥
于舊日四色之別、仍套援此斥彼之習、則
貴國維新宏業、何可期於底成、若夫近來所
謂清黨、洋黨、日黨、若或閔派、朴派者、無非均
是朝鮮臣民、惟宜材能是視、不可以黨派之
別、定其取舍、用昭新政府公平大量、
二近聞將有執閔泳駿、閔泳柱等數人之命、惟
彼等既蒙

恩詔赦放者也、其餘卽有罪可問者、自有法章

可擬、何得任情縱捕、令人疑懼、莫措、如必欲
執彼等置之罪戾、則何異於各懷私怨、暗相
結合、倚勢洩憤、此適招作對頭、相與抵抗者、
益形加多耳、當此時、務宜寬宏處事、使彼等
相安如恆、併釋衆庶惶惑為要、

又聞、因此次事變、歸咎于前軍部大臣及前
警務使二人、將有更置于嚴法之議云、惟思、
糾罪處罰、自有法章可遵、何可肆意濫行、且
昨讀貴國官報、悉已照懲戒例、將該二人褫
職、則此外似無可更議者、萬一有假托查糾

該二人罪戾、藉以洩素日私怨等情、本使未見其可也、

聞近日貴國官民恐為拘拿、輒避入各國使館匿跡者多云、如果措之不理、則後患深為堪虞、宜於此時由

大君主明降

諭旨、所有事外無干之人、概不糾查、俾各相安堵、以釋衆疑而免生枝節為要、

致金總理大臣書

敬啓者、今晨本爵開具管見、恭呈

國太公邸下炳鑒、為特另行抄具、併呈

閣下揆閱、因望

閣下及

各大臣、務當念々惕戒、勿或稍涉疏忽、萬
一誤其所向、於施政處事、或有趁機洩憤
報怨是事、則本爵確信

貴國維新宏業、斷難成就也、即希

亮鑒、熟察為荷、肅此順頌

鈞社

子爵

三浦梧樓頤

十月初十日

致大院君書

肅啓者、貴國方今形勢、誠屬切迫危急之
秋、固在

邸下洞鑒之中、日前曾奉晤祕談、約知其端、
梧樓所見亦實相同、就惟

邸下旣居

宗親重位、當此垂殆危迫之時、輔翼

大君主、併保育

王太子、以維

王室、莫安鞏固、且以期圖

宗社之安全一屬

邸下當務之責惟望

邸下悉心經理以匡時局梧樓無任翹盼之至但治國政務自有當局承理而其職責攸歸各相分明無庸

邸下兼顧固不待多言也為此謹瀝陳鄙見冒瀆

尊嚴敢請

邸下鑒察肅頌

崇祉

子爵 三浦梧樓頓首

十月初十日

大朝鮮外部大臣金

為

照會事照得日前我訓練隊兵丁與巡檢等相鬩致巡
檢或死或傷城中囂然于時有訓練隊革罷奪回兵械之
說諛訓鍊隊等愈滋疑悞轉相騷訛所在屯聚不散忽於
本日早朝諛兵丁等突入

宮門聲稱奔訴冤狀舉措叵測幸賴我
大君主陛下威赫諭之以大義旋即鎮定無事

宮廷晏謚已將諛軍部大臣及警務使行罷免以懲不能
御下釀成闕擾之罪諒

貴公使素敦友誼凡有事情無不關於

綺注茲以備文照會請煩

貴公使查照可也須至照會者

右

照

會

大日本特命全權公使子爵三浦

開國五百四年八月二十日

金外部大臣宛

三浦特命全權公使

以書東致啟上候陳者貴曆開國五百四年八月二十日附第
十九号貴公文ヲ以テ貴國訓練隊ノ兵士宮門ニ突入シ哀
訴スル所アリトテ騷擾ヲ為シタルモ説諭ノ上無事鎮定
ニ歸シタル義ニ関シ御申越之趣領悉致候
右回答申進候敬具

明治廿八年十月九日

以書東致啟上候陳者昨朝貴 宮闕内騷

擾ノ際宮内參理官全腹基氏來り 大君主陛

下ノ旨諭ヲ傳ヘ本使ニ鎮撫ノ御依頼有之候ニ付

本使ハ直ニ参内致シ處其前戎守備隊ハ鎮撫ノ

為メ出張シ騷擾ハ既ニ全ク鎮定シ居リ而シテ右騷擾

ハ貴訓練隊兵等訖寛ノ為メ進宮シタル處侍衛隊

及ヒ警察官等ニ遮キラレ遂ニ此ニ及ヒ事ト致承知

候尚本使退闕ノ後傳聞ニ據リ該騷擾鎮定後

直ニ同訓練隊ヲ以テ宮中護衛ニ相充テラレタル旨

致承知候因テ查スルニ貴訓練隊兵ハ亦ト何等ノ寛

罪ニ因テ宮闕ニ向ヒ申訴セントシタルヤ未タ之ヲ詳ニスル

ヲ得スト虽氏彼等恣ニ隊伍ヲ組ミ銃器ヲ携ヘテ宮

中ニ押入りタル所爲ハ實ニ容易ナリサル次第ニ付キ嚴重
御取調ノ上相當ノ御處分ヲ行フニ偏ニ致希望候
且又該訓練隊ヲ以テ直ニ王宮護衛ニ充テラレタリト
ノ風説ハ果シテ事實ニ有之候ハ、在ハ正當ノ御處
置ト難相認リ間是又改メテ御處置相成リ以テ
名義ヲ明シ内外人ノ惑ヲ相解カレ候事頗ル急務
ト被存ル所使ハ年來ノ交誼ヲ重シ特ニ貴政府ニ向
テ前顯兩条ノ御處分ヲ御勸告ニ及ヒハ間可然御
照諒相成リル様致度此段照會得貴意ナリ

明治三十八年十月九日

特命全權公使子爵三浦梧棲

外部大臣金允植閣下

大朝鮮外部大臣金

爲

照覆事昨接

貴公使照會內開（以下往文同）等因准此查
再昨日

關內兵變之由已經備文說明在案始緣呼
訐聚衆竟至入

關亂動查辦予罪不容不嚴惟我

大君主陛下聖度天大包容含蓄實之近密之
地掌兵之臣雖一時將順揆以事體誠非一町
宜謹當以

貴公使勸規之意知照軍部以圖

奏明迅辦俾解人惑茲以備文照覆請煩

貴公使查照諒會可也須至照覆者

在華鯨鰓田村公使館

右

照

會

大日本特命全權公使子爵三浦

開國五百四年八月二十二日

敬啟者、所有再昨日兵變緣由、當准

貴大臣來文備悉、除業經備文照復在
案外、查日來外間相傳、本月初八日晨、訓
鍊隊兵丁突進

闕內訐寃、伊時見

有便服之日、奉人若干名混同入內、肆行逞
暴云々、本使雖知此說、出自傳聞之訛、無
足相信、但事關緊要、未便置之不理、料
貴政府已將此次兵變緣由、早經糾查得實、
為此請煩

貴大臣、確查此說、是否屬實、迅速

示復、是為至禱、肅此、順頌

台祉、

在韓魚園在公傍

子爵三浦梧棲

十月十日

教者下兼

雅海論及東亞古今之亂之亦已極

雖殊其要只在公私二字而已教者

直日事諒為

閣下之計稔悉而官中府中云

益缺裂類滯之形如在目前顧

乏預備之術滿心憂具不知計為

惟思奉身而退耳不知

閣下將何以教之君子產叔而各陳

其憂國之誠款曲無隱謹援古事

敢私布於左右伏請

台安

金之桂也

我乃子也

敬啟者某時國分通譯官備悉
下般疾身之意自願志雖切而材不逮抑
濟之通無術可施惟當退步而讓賢
舍公私之利害幸耳未
以公下以為如私布之乞
受賜而酒諒之肅此附
時安

弟金弘集啟

我乃子也

敬覆者昨接

貴函內開所有再昨日兵變緣由當准貴大臣
來文備悉除業經備文照覆在案外查日來外
間相傳本月初八日晨訓練隊兵丁突進

內閣

內訌寬伊時見有便服之日本入若干名混同入
肆行逞暴云々本使雖知此說出自傳聞之訛無
足以相信但事關緊要未便置之不理料貴政
府已將此次兵變緣由早經糾查得實為此請
煩貴大臣確查此說是否屬實迅速示覆是為
至禱等因准此業經知照我軍部詳詢頗未去
後旋接來復內開已經查覈我軍隊稟稱當日
曉頭赴訛之際本軍隊必其侍衛隊若兩下相遇

倉猝不能詳審易致衝突之慮故假粧外國人之
服裝期無兵刃相接之患乃使前導幾名模倣日
本人私服以示非軍旅之意也其實並非真箇日
本人也據此查該軍隊慮有衝突暫用權宜確
鑒有據矣茲以備文照覆照亮作覆丁也等因
准此茲肅函覆請煩
貴公使照亮為荷此順頌
日祉

金允植頌

我八月二十四日

十月十二日接

末意謹悉某案不待已事而致其
罪不盡則無可廢之只突兵丁亦
不厭於其心也且未聞責眼者欲
自外不相干涉也畢竟以
大君主之意意內大臣及各大臣皆副
署耳若有出門之時即當平候矣

印才 吉渡 抄

案文只一經三府二使之覽耳今者則
露美兩使入見我
大君主言談國典之在仁港者皆將召入
其公館而設報云又問于宮內大臣曰
日兵不為隨大院君乎答曰無之又問
曰有見之者胡為乎無云答曰無之故
意自
仁足即通于二使彼如何

老翁自

運啓者今午五時俄米西公使陞見而
奏以護衛兵幾何入城事我
陛下答以國亂已平不必如是長大則又
以各其館護衛事牢請矣諒存慶之
為希
今日勅令已為頒布耳崇欽奉候
順頌
大安

趙義淵 啟

敬復者作奉

大誠隆易冊二徑深荷

貴公使用心周執事感訪客已謹書導

教辦理如慢政體望

貴公使遇事相海俾全大局肅然

佈謝頌頌

勾安

牙金弘集

秋眉八日

名 称	三 浦 梧 楼 文 書
標 題	大 院 君 入 關 始 末 一 綴

分 類 番 号	125

登 録 番 号	
------------------	--

大院君入闕始末

近日宮中、事謂フニ忍ビザルモノアリ王后閔氏親黨ヲ援引シ聰明ヲ壅蔽シ弊竇百出李氏五百年ノ宗社幾ト一朝ニシテ廢頽セシトス大君主陛下國政、日ニ非ナルヲ憂ヒ民心、日ニ乖リテ慨キ茲ニ我カ十月七日午前八時密旨ヲ大院君ニ傳ヘテ曰リ近日群小彙進權ヲ弄シ音ヲ矯メ將ニ國兵ヲ解散シ重臣ヲ殺害シ國家ヲ擾亂セシトス

此時、當リ。我國太公、非ガレバ、以ニ
波瀾ヲ挽回スル能ハズ。其レ宜シク速
ニ趁ヒ入關シ。君側ヲ掃除シ。革新、鴻
圖ヲ成就セヨト。大院君タルモ、身宗
親ノ家ニ在リ。烏ニゾ得テ眼前危機ヲ
座視スルニ思ヒシ情既ニ此ノ如ク。而
シテ勢既ニ彼ノ如シ大院君是ニ於テ
ヤ起リ。嚮ニ大院君、孔德里ニ幽居ス
ルヤ。閔氏ハ尙其冥々、勢力ヲ畏レ總
巡巡檢ヲシテ之ヲ嚴監セシム。一出一

入亦々意ノ如キ能ハズ。然レドモ今ヤモ
命煥如トシテ下レリ。蹠蹠車ヲ誤ルヲ
容サス。乃チ使ヲ馳セテ家從ニ通シ。更
ニ平生知遇スル所ノ日本人十數名ニ
告グ。翌ハ日午前二時半急ヲ聞テ来リ
會ス。是ニ於テ家從ヲシテ日人ノ服装
ヲ着ケシメ。但ニ参内ノ隨伴ヲ命ス。蓋
シ日人ニ擬スルニ非ガレバ。兵士ノ輕
侮抵抗スルヲ以テナリ。一面ニハ此ノ
如クニシテ行進ヲ警戒シ、而シテ一面

ニハ榜文ヲ頒布シ。適ク入闕ノ意ヲ知
悉セシム。曰ク

榜

近日群小壅閉 聰明斥賢用奸維新
之大業將中道而廢五百年之宗社一
旦而危余生于宗親之家情不忍座視
故今欲入 闕補翼

大君主遜斥群邪成就維新之大業扶
持五百年之宗社以安爾等百姓爾等
姓皆守其堵守其業勿敢輕動若爾等

百姓若兵辨有沮我行者則必有大罪
矣爾等悔無及

閏國丘百四年八月二十日（我十月
八日）

國大公

三時半孔德里ヲ虜シ。四時半西大門外
ニ抵ル。途ニ一隊ヲ將卒ニ遂テ。蓋シ刻
鍊隊第二大隊ヲ積懷ヲ大院君ニ訴ヘ
ントスルナリ。大院君乃々士官ヲ召シ
令シテ曰リ。予今王命ヲ以テ入朝ス。若

シ沮格スルモ、アヲバ撃退シテ通過
セヨト。

五時三十分光化門ニ達ス隊兵門、右
側ニ在リ。大院君、轎輿ニ登視ス。大院
君顧ミスニテ進ミ。先ツ外殿ニ入リリ
而シテ從ツ所、將卒之ト應酬シ。須臾
ニシテ隊兵ハ悉ク逃竄セリ。此騷擾ノ
際宮内大臣李耕植及ビ訓鍊隊長洪啓
薰命テ砲煙中ニ殞スト云フ
時ニ六時十分。大院君主陛下ハ内殿ニ在

ラセラル。大院君乃チ趨テ謁見セラル

王命ニヨリテ参内ス。這般ノ事如何カ

處理セントテ奏問ス。陛下曰ク請テ其

レ宜ニ從ヒ指劃セヨト尋テ勅アリ。曰

ク趙義淵ヲ以テ警務使ニ任セヨ。曰ク

武藝別監ハ仍置セヨ。曰ク速ニ内閣大

臣ヲ召セヨト。既ニシテ陛下ハ御座ヲ

隣殿ニ遷カレ三浦公使ヲ召ス可キノ

命アリ。

七時。公使ハ参内シ。大君主陛下及世子

宮殿下ニ謁見セラル。八時。内閣大臣金

弘集金允植中樞院議長鄭範朝參内十

時敕アリ李載冕ヲ宮内大臣ニ金宗漢

ヲ同快辨ニ任セラレ而シテ軍務大臣

安駟壽學部大臣李完用農商工部大臣

李範普警務使李允用各本官ヲ免セリ

ル。時ニ各閣公使ハ參内アリ陛下ニ大

院君ト席ヲ同フニ謁見ヲ久カル。

露公使ウエバハ曰ク。是レ何等ノ喪

リヤ此喪アルヲ豫知セバ。何カ故ニ通

牒ヲキ。通牒ニシキアラバ。直ニ我兵ヲ
馳セテ之ヲ救ハシ。寧口等閑ナル勿ラ
シカト。陛下徐ニ曰ク。騷擾ニ際シ三浦
使ノ參内ヲ乞フ。兵士亦タ警備シ来ル
而シテ騷擾ハ既ニ鎮定セリ。復タ御ヲ
煩スヲ要セズト。露公使更ニ大院君ニ
詰ル。大院君曰ク。予ハ山莊ニ此居ル此
變アルヲ豫知セヌ。昨王命ニヨリテ參
内シ而シテ騷擾ニ際ス。予乃チ之ヲ鎮
定セリ。予ヤ既ニ茲ニ在リ。請フ配慮ス

ル勿レ。露公使曰ク。危急相致、ハ隣邦
ノ誼ナリ。故ニ我兵ヲ入城セシメ。以テ
護衛セシ、大院君曰ク。若し個一時ノ小変
爰ゾ深ク意ト為スニ足ランヤ。且以堅
邦微ト雖モ自家ノ乱。自家ノ力ヲ以テ
鎮定ムルニ足ン。況ンヤ妄リニ他國ノ
兵ヲ入城セシメバ、人心洶々却テ騷擾
ヲ増スノモ。請フ断然謝絶セシト。曰ク
然ラバ則チ何カ故ニ獨リ三浦公使ニ
乞ヒシヤ。曰ク。日本ハ最初ヨリ我邦ヲ

保佑セラレシ關係アリ故ニ又タ之浦
公使ヲ煩ハセシノミ曰ク日本壯士ノ
入り来リシハ如何。曰ク是レ素ト予ガ
知己ノ輩^{オノ}ノ入關ニ由リ護衛ノ為メ
ニ隨伴セシノミト露公使此ニ至リ默
シテ言フシ
十日王^女ノ派^セヲ舉ケテ廢シテ庶人ト
為シ玉フノ詔勅アリタリ

詔勅

朕臨御以來茲ニ三十二治化普洽ス

能ハス就中王后関氏ハ其親黨ヲ
援引シテ朕ノ左右ニ布置シ朕ノ聰
明ヲ壅蔽シテ人民ヲ剝割シ朕ノ政
令ヲ濁乱シテ官爵ヲ鬻賣シ貧虐地
方^〇ニキヲ以テ盜賊四起シ
宗社ハ岌々トシテ危殆ニ瀕スルヲ
至ス朕其極悪ヲ知り而シテ是ヲ罰
シ得ガルハ朕ノ不明ニヨルト雖モ
亦其黨與ヲ顧忌スルノ故ヲ以テナ
リ朕是レヲ壓抑セシガ為メ昨午十

二月

宗廟ニ誓告シテ曰ク后嬪宗戚ハ國
政ニ干涉スルヲ許サスト以テ閔氏
ノ改悟ヲ冀ヒシモ閔氏ハ舊惡ヲ悛
ス其黨與及ビ群少輩ヲ潛ニ相引
進シテ朕ノ動靜ヲ察シ國務大臣ヲ
引接ヲ防遏シ又ク朕ハ旨ヲ矯テ朕
ノ國兵ヲ解散スルトナシテ乱ヲ激
起セシム而シテ事變ノ出ルヤ朕ヲ
離レ其身ヲ避ケテ壬午ノ怪事ヲ踏

襲シ訪求スレに出現セズ是レ王后
ノ爵德ト稱ス可カラガルノミナリ
ス其罪惡貫盈シテ先王ノ宗廟ヲ承
ク可カラス故ニ朕ハ之ヲ得ズ朕ガ
家ノ故事ヲ謹倣シ王后閔氏ヲ廢シ
テ庶人トナス
勅

開國五百四年八月二十二日

宮内大臣

季載冕

内閣總理大臣

金弘集

外部大臣

金允植

內部大臣

朴定陽

度支部大臣

沈相薰

軍部大臣

趙義淵

法部大臣

徐光範

學部大臣臨時署理

徐光範

農商工部大臣署理

鄭秉夏

詔勅

朕王太子，孝誠，卜情理，卜願念。

特ニ嬪號ヲ廢庶人関氏ニ賜フ

開國五百四年八月二十三日奉

勅 宮内大臣李載冕

昨日處分ノ事由當ニ

太廟

太社

閔宮ニ告由スルノ節即チ舉行ヲ爲

スベシ

開國五百四年八月二十三日奉

勅 宮内大臣李載冕

露公使謀計始末

露公使韋貝ハ轉任ノ命アリシヲ以テ中宮
陛下ニ依頼シ國書數次往復シ當國ニ永
駐スルヲ圖シリ且又當國ノ人物如何ヲ腹心
ノ韓人ヲシテ搜探セシメ遂ニ中宮陛下ト共
謀シテ重臣數十餘名ヲ殺戮セシト計劃
セリ

敬白朕之良兄弟
俄羅斯國

皇帝陛下交好有年報聘尚遲殊用歎
張現我國以政不得人受侮亦滋貴國
汎來公使韋貝才德兼備多所咨訪實
為兩國之幸近聞有移駐清國之說此
雖塗聽惟我地壤相接關係不與他等
必使韋貝久留我國俾有襄助益致
兩國之敦睦至以為盼便維

陛下宏猷隆盛化理清明更希深念大局
無孤此言

開國五百四年朕御極三十二年五月二

十三日在漢陽宮中

陛下良兄弟

姓諱

御璽

親書業經脩送今聞

貴公使韋貝移駐墨西哥全權撫念大局不勝虞憂朕咨詢日滋輔益既多須定我國全推仍使久留以昭陛下相濟之誼為希

朕御極三十二年閏五月二十九日朝鮮

漢陽

御銜

俄國皇帝陛下

訓練隊起開ニ付安前軍務大臣内報

乙未八月十一日(日曆十月六日)午後八時保護
後田大奎来リ告テ曰ク今一二訓練隊ノ兵
梨峴ヨリ来リ黃土峴ニ抵リ警務廳ヲ毀
破スト聞テ甚ダ驚駭シ一方ニハ書ヲ聯隊
長洪啓業ニ送り連ニ嚴飭禁断セシメ一
方ニハ書ヲ入直ノ郎官ニ送り其詳細ヲ嚴
査セシメ其二處ノ回報ヲ待ツ時將ニ夜半
半ニ至ラントス宮内府別撫安光祿出テ来
リテ敕教ヲ傳フ曰ク訓練隊ノ兵丁巡檢
ト相聞キ警務廳ヲ毀タント欲シテ數百
ノ兵卒短刀ヲ携ヘ長棒ヲ持シ現ニ警務
廳前ニ在リ其聞聞ノ聲大内ニ聞ヘ中

宮陛下因テ驚冲症ヲ成ス軍務大臣即チ
生ヲ、兵丁ノ騷動ヲ禁スベシ尚且鎮安也
スンバ日本後備隊ニ赴キ日本將官ヲ
テ之ニ曉諭スルヲ乞ヘト即チ為メ二月ヲ出
テ直ニ先化門外ニ抵リ詳ニ其動靜ヲ探ル
月明ニ夜闇ニ四方靜寂タルノミ乃チ巡検
ヲ警務廳ニ派シ之ヲ探ル談廳諸警官
云フ先刻訓練隊兵丁百有餘名来リテ
警務廳前ニ集リ本廳ヲ打破セント欲
スト聞ク諸警官迎撃ト一會ニ會集商
議シテ曰ク我等儼然此ニ在レバ彼兵丁
必ス突入先リ廳舎ヲ破リ次ニ我等ヲ殺
サン如カズ門ヲ開テ生テ彼ト相戦ヒ一ニ勝カ

ヲ決セシニハト數百進換皆曰ク諾ト門ヲ開
キ即チ出テ劔ヲ拔テ追逐ス百餘ノ兵丁東ヲ
望シテ遁去シ互ニ相傳語シテ云フ銃ヲ擔ク
テ来リ一ニ勝負ヲ決セシト進換回報ス予
直ニ前仕衛管日本後備隊ニ赴キ石森大
尉ニ面シ前事ヲ陳述シ且リ曰ク足下既
ニ其兵丁ヲ教ユ若シ足下ニシテ一往曉喻
セバ兵丁以テ安堵スベシト大尉曰ク事ノ
顛末既ニ是ノ如シ且宮内府敕教ナリト云
フ僕豈ニ一往ヲ惜マン然レ氏吾一人ノ言ヲ
以テ曉喻安堵シ難キニ似タリト予曰ク足
下若シ一往スレハ以テ安堵セシト大尉直チ
ニ訓練隊ニ向フ予即チ軍部ニ歸リ坐シ

テ大尉ノ歸來ヲ俟リ約一時間大尉軍部
ニ歸來リ事ニ謂テ曰ク訓練隊ニ到リ其
動靜ヲ觀ルニ門鎖シ燈滅シ聲ヲ皆穩
眠平常ニ異ラズ又大隊長ヲ起シ之ヲ
問ハバ曰ク今夕兵丁一箇門ヲ出ルナシ何
ノ起開ノ端アラシヤ云々詳ニ其動靜
ヲ察スルニ果シテ異疑ナシ故ニ即チ歸リ
来ルヲ為スノミトテモ亦テ訝惑ニ勝ヘス
乃チ警務廳ニ往キ諸警官ヲ召集シ石
森大尉ノ傳ヲル所ヲ專ラ諸警官相
顧ミ其事由ヲ辨明スル能ハスヲ警官ニ
謂テ曰ク今夕兵丁ノ起開何ノ據ル所ア
ル乎警官曰ク別ニ明白ノ証據ナシ雖夕

詰問スル鈔アリト云クノミ予曰ク其詰問スル
所ノ端昭詳記録明早軍部ニ持ケ来シ
ト乃々家ニ帰ル

十九日(七日)午前二時宮内府ヨリ召命アリ即チ
為ノニ内ニ詣リ中宮陛下ニ謁ス下教ニ曰ク俄
ニ夜半丁ト巡檢トノ起開果テ是レ意外ノ事
変ナリ日前兵丁ト巡檢ト端ヲ起開巡檢一
名ヲ殺害シ各處交番所ヲ打破ス兵丁ノ所
為誠ニ驕妄ヲ極ム故ノ如キ兵丁ト隊官トハ
尋常ニ之ヲ處ス可ラズ大隊長以下中隊
長幾人即チ免黜シ二訓練隊兵丁持スル
所ノ鎗劔銃彈ハ即チ棄ニ奪回シ兵丁ハ姑ク
解散ヲ爲セトノ教アリ且ツ日ク迄々直ニ日廣

ニ往キ公使ト相議シテ後即々連ニ之ヲ行
可也ト予即々退キ來リ家ニ歸ル時ニ午前
四時ナリ九時日館ニ赴キ一々去夜ノ事實
ヲ陳言ス日使曰ク先キニ已ニ此事ヲ知悉
ス是レ特ニ聞享ヲ名トシ解隊ノ陰謀ヲ遂ケ
ントスル者ナリ現ニ今杉村ト言此ニ及ヲ果シ
テ然リ君ノ口舌ヲ以テ宮中ノ秋謀ヲ漏
泄セリ兵丁ノ散ト不散ト惟タ貴政府ノ處
分ト貴大臣ノ措處ノミ義トシテ強テ其
間ニ言フヲ得ズ唯慙ム一國ノ君主トシテ如
是卑劣ノ所置ヲ以テ自ラ臣下ヲ相敵視
セシム且ル此兵ハ日本士官ガ精勵シテ訓
練セシ精銳ノ士ニシテ交換モ亦タ日本ノ

誘導ニヨリテ教練セシ者タリ是ラ之ヲ顧ミ
不今互ニ相敵視セシム此ノ如クニバ從來日
本が貴國ニ對シテ盡セシ厚顔ハ空ニク水
泡ニ帰シ去ラシサレバ貴國ト日本トノ交
誼ハ果シテ如何予依然トシテ軍部ニ帰
リ警官ニ入リ招致シ兵丁昨宵起歸ノ
實証即チ速ニ記録シテ以テ来シ今日
軍部軍法局理事ニ負日本輔佐官一
員ヲ派遣シ嚴ニ其事実ヲ査セシム教
官應諾シテ歸ル時午後五時尙回報ナ
シ六時警官一丹子ヲ持シテ来ル予即チ
考問スルニ章句糺糊以テ訂據ニ難シ
予警官ニ謂テ曰ク此文句以テ証據ノ

端ト謂フヘキカ警官曰ク此文句ヲ以テ果
ニテ準據シ難キカ予曰ク以テ準據シ難キ
何ヲ以テ嚴査スト謂ハシヤ又夕據ル可キ
ノ端ヲラハ更ニ持来ラセ也同日午後十一
時ニ至リ宮内府侍衛隊隊長玄興
彈ヨリ書アリ云フ訓練隊ノ軍器既ニ
奪回セシヤ速ニ回答セヨト予即ケ答書
ヲ送り明日將ニ其首犯者ヲ嚴査シ罰ヲ
施サン而シテ軍器ハ姑ク未夕奪回セバ
ト玄興彈又夕書アリ直ニ奪回ヲ行フノ
意敎教アリ予又夕明日之ヲ行フヲ以テ
答ヘ遂ニ困眠ヲ爲ス既ニシテ門外喧嘩
ノ声アリ即ケ起テ之ヲ視ルニ訓練隊

聯隊長洪啓薰來り言テ曰ク今聯隊
副官報告書内一二訓練隊大隊長兵
丁ヲ率ヒ各銃彈ヲ持シ今來リ光化門
外ニ到ルト云フ予驚來ニ勝ヘス洪啓薰
ニ向ヒ君先リ即ケ光化門外ニ往ケ我亦
裝束シテ速ニ追往セント洪君諾シテ去ル
五分時限ヲ過キズ一訓練隊一小隊兵丁
ヲ率ヒ旋轉シ高聲ニ言テ曰ク一小隊兵
丁建春門外ニ在リ領率シテ即ケ來ルト
予洪君ト同シク隊兵ヲ率ヒ即ケ光化
門外東邊石欄下ヨリ數十歩ノ地ニ抵シ
ハ則ケ光化ノ東夾門始メテ開ケ一轎子
先ツ門ニ入り後ケ訓練兵丁擁入ス故ニ

予聯隊長洪君ト商声ニ曰ク兵丁勿入ト
ト隊卒兵丁一齊高声ヌ大臣ト
聯隊長ト此ニ在リ兵丁勿入ト
言未タ畢ラサルニ西邊ヨリ砲声起リ矢
丸来ル一隊後ニ在リ兵丁ハ盡ク遁去ラ
為ス洪啓業丸ニ中リ地ニ仆ル光七郎
外ノ兵丁盡ク門内ニ向テ入ル予軍部ニ
向ツテ去ルノミ

名 称	三 浦 梧 楼 文 書
標 題	三浦梧楼 内報考 一 綴

分 類 番 号	126

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

相成此致、事案に關し閣下と深き痛神お互
似共恐懼至處に知り所い若く付テハ是迄外務大
臣、向に通令電報をなす事止むは積量あや
へつた存る所、若く先分ノ屬者へも付、星
亨より改訂改サセり、事柄も熟に諒ノト存り
抑々事ノ起因より尋ふん、昨年七月、國黨政府ハ
破壊せられ、政權回國に轉り、以來王統ハ痛々遠
憾に思ひ之り、恢復せしめ、若く是より近而方々、運
うし初メ井上公使ノ力に依テ大隈君ヲ叩し尋テ朴
海老ノ利用に、今金宏集ヲ斥ケ遂に朴海老ヲ逐
々奥先中より免しテ、漸次政權ヲ宮中ニ收メ、其間
裏面ニハ魯使に通しテ、其勢援ヲ借りタムハ、全ク

事實に方ぐり且ツ井上公使着任、初メ呈出しタル
施政綱領二十条中、堅ク王妃、政務に干渉スル
ヲ禁じタル處、公使再訪任、後其一節ヲ削除シ
美、再呈出しタル意見書十七条中、於テハ王妃
ハ國王ト同様ニ政事ニ關係スルヲ得ルト爲シタル
ヲ王妃ハ茲ニ如ク日本政府、認許ヲ得タルモノ、
以テハ得蓋々其努力ヲ政事上に還テシ惣ニ大小
ノ方々ヲ進退シ政府、此源々之ヲモハ漸次之ヲ
王室財産に組入シ宮中政事ヲ公示セシカ爲メ宮
内府自ラ勅令ヲ發布シ（其前宮内府得テ屢々勅
令ヲ發布セシトシタルモ内閣ノ爲メ之ヲ遮テ其
意ヲ果スル能ハケリシカ去月下旬ニ至リ遂ニ宮内
大臣乃堂禮院長、列署ニテ勅令第一号ヲ發セリ）

造幣局ヲ宮内府ニ移属セシメ、前々府金部鎮ヲ
休ケ移進シ日本士官ノ教習シタル訓練隊ヲ解散
シテ政府派ノ爪牙ヲ奪ヒ（此前三派隨一ノ人ヲ尋
テ弊ヲ務ム）任シタル警察長（既ニ官中ノ物トナレリ）
然後金部集以下十一人ヲ刺殺セシトノ陰謀ヲ企テ
既ニ訓練隊ノ解散ヲ而執リタルハ本月七日朝ノ事
ナリ時勢如斯ク切迫シタルハ金部集等ノ憂念
ハ愈痛訓練隊ノ激昂及大院君ノ非常ナル激憤ハ
一時ニ爆發シ来リシ狀ニ方シリ又稱シテ帝國
於タル我邦ノ勢力如何ヲ視ルニ至寧政府カ我味方
ト爲リ我ニ依頼スル心アレハコソ我勢力ヲ維持スル
ヲ得ヘキモ至寧正ニ敵方ニ爲シ政府亦敵黨ヲ
以テ充サレ、片ハ我勢力ハ一朝としテ地ニ墜チ忽チ

昨年前、曰く、漢人、一、野蠻ナシハ、近來、特ニ注意シ
 タルハ、勿論ナシ共、何セシヤ、下シテ、ナク、及、去、若シ我
 ハ、目ヲ、眠リ、手ヲ、拱シテ、能、等、力、自、然、ニ、修、ル、片、ハ、訓、練
 係、ハ、解、散、モ、ウシ、金、宮、集、以、下、或、ハ、殺、害、或、ハ、放、逐、セ
 ン、レ、日、本、國、カ、今、日、迄、尽、シ、来、リ、シ、而、後、ノ、事、業、ト、努、力、ハ、
 一、朝、ミ、シ、テ、水、泡、ニ、帰、ル、ル、ノ、ミ、ナ、ラ、ス、茫、然、自、失、ノ、餘、リ、多、敷、ノ
 顧、リ、方、モ、用、工、人、ニ、術、ナ、ク、從、テ、軍、隊、モ、能、マ、リ、撤、退、セ、ン、
 、、ミ、事、態、甚、大、リ、見、ル、ヲ、モ、明、ナ、リ、ト、存、リ、此、中、實
 際、ニ、當、リ、テ、ハ、假、令、本、方、ニ、能、ス、ト、モ、唯、々、諾、々、ト、
 拱、シ、目、ヲ、眠、ル、者、ハ、ミ、ナ、ク、方、後、辯、ヲ、擧、ヘ、テ、之、ヲ、云、ハ、我
 方、力、ヲ、能、持、シ、當、初、ノ、目、的、ヲ、達、ス、ル、上、ニ、能、テ、ハ、實、ニ、不
 得、止、此、ニ、出、テ、タ、ル、ト、考、ヘ、ル、前、後、ノ、事、情、熟、ト
 考、推、察、被、成、シ、處、モ、知、ル、前、述、ノ、以、外、ニ、今、我、方、信、隊

八國より帝乱鎮撫、任務ヲ以テ入關シタルに、お遠十年
モ其の實效ニ應ジテ此の原より或ハ命令ヲ誤リタルヨリ、
結果トシテ他人ノ批評ヲ来シリ、不新又大隈君、
隨從シテ入關シタル仕士等モ實ハ默認シテ陰ニ使
用シタル情アリハ事後ニ至テ獨リ罪ヲ被等トシテ改
セシメ難キハ至深クは我々も亦然リ要之今回、
事件ハ當國二十年來ノ禍根ヲ絶テ政府ノ基礎
ヲ固メ一キ端端ヲ冥キタルト本友、新ヲ確信シ
ニ中何令其所爲ハ過激ニ決ムモ七日此先キ外交上
ノ困難サ一切撥クルヲ得ハ我々神政昭ハ之、儼テ確
立スルヲ得ヘシト存リ目今ノ處ハ宮中政府トモ然テ
我々方ト爲リ總理大臣以下平素、如何沈着トシテ務
ヲ取扱ヒ只原政府、基礎ヲ固メ以テ我々政府勸告ノ

越えて遠ハセト不屈不撓ノ心ヲ以テ熱心ニ勉強必
ズ其旨而後蓋々現政府ヲ助ケテ改革ノ実効ヲ
奏セシムルノ頗ル緊要ノ事ト存シ萬一我政府ニ
於テ外ニ對スル一時ノ挫折ト思ヒ遠ハレケル迄ハ力
針ヲ暫ヘ現政府ノ人々ヲ疎外シテ更ニ旧主死派ノ
人ヲ入シ現政府ヲシテ孤立ノ姿ニ陥ラシムルハ當
政府ハ忽チ瓦解シ其後之權收ス可カラザルニ至ルハ
必ズト存シ要スルニ今回ノ事ハ其行リ方ハ少ク拙劣
ニ涉リ禮讓ヲ隱スル能ハザリシ謗アリ免シスト吾民
本是レ万不得已ニ出テ而テ能ク其目的ヲ達シタル
モノナシハ其得タル果實ハ飽返モ失ハザル根柢堅ト
存リ故ニ外交上ハ首都ナリ本在リ故メ重ナル故
更ニ交通セシメラレ、一アムトシテモ之レト同時ニ現

此乃新造法每添予中進

一在草魚區以下公何食

名称	三浦梧楼文書
標題	三浦梧楼旅欧事件 綴

分類 番号	127

登録 番号	
----------	--

廣西縣志

在監人書信紙明治 年 月 日 受信者

報告書の進申

報告書抄 先般ノ豫入當處ニ於テ秋原警部新に査
ツレ治里一遣セシハ安達等ニ仕シ引カレラ遣セシト同様趣
意ナリト申立タレ處右ハ大院君入瀕ノ目的ヲ無事ニ達セシメ
為シ昨午七月事變ノ際ノ例ニ倣テ政略上護衛ノ為ニ遣
ハセシモノナリ又々安達謙房等ヲ引德里ニ派セシモ亦尊王
政略上大院君入瀕ノ途ニテ救済ヲ為シシメタレ者、有之候
右及進申 次相具

明治廿八年 三月廿日

本署ハ人等ノ如ク豫入初セシモ本署日更出タリ此等ノ事進
出ノ上ニ其ノ進出ノ上ニ其ノ進出ノ上ニ其ノ進出ノ上ニ其ノ進出
ケルハ一日一書ヲ用ヒ大形ナリ上ニ政略ヲ行シ生ナシハ法理上ノ
又カメト又一方ニハツラハ政府持メトニ其ノ進出ノ上ニ其ノ進出
ト進出ナリ

孫金富判事

三浦梧村

刑事部

三浦梧村

被告事件の訂正

被告樺井孫富第五回、其於テ自分より外勢を匿し宛に電文中過激
事、朝鮮人を為リレハ約束云々、文字より御調ラ受テ其節、憚ハ處之ナリ
其為ニ言語明瞭ヲ欠キ、午後孰も致し候、若シ該文字より或ハ不測ノ關係ヲ大
ナラシムヤモ、計リ難シト存シ候、乃チ其當時ノ事實ヲ忌憚ナク申述
致し候、抑モ其時我内閣ノ勢、動不取、際ニ其氣、臨ノ緩急を為メ、一時ノ方便
ニ用イレ、語句ニ過キ、其誤ハ既、該事件より外務大臣ヨリ、果ハ關係ノ有無ヲ
以テ非ハ、心離シ、茂電セシ、對シ、言方々、右如クセシ、其實際決シテ自分内外
人、對シ、斯ノ妙ノ約束モ、其力セシ事、之ニ無キ、依テ事實、前仲ノ如シ訂
正致し候也

明治廿九年一月六日

刑事被告人

三浦梧棲

廣島地方裁判所 孫富判事

吉田美秀 殿

勾引状

東京小石川区中富坂所
十八日

三浦梧棲

右謀殺及之先徒聚衆ノ事件ニ付

當裁判所へ勾引ス可キ者也

但本人潜匿シタル時、家宅ヲ搜索ス可シ

明治廿八年十月廿一日 時

廣島地方裁判所

檢察官 吉岡 秀孝

裁判所書記 田村 義彦

勾引シタル被告 人ノ署名捺印 若シ能ハサル時 ハ其事由	執行シタル 月日時	執行シタル 場所	執行ノ手續	家宅搜索ヲ 為シタル時ハ 其由	勾引スルヲ能 ハサル時ハ其 事由	右之通取扱候也	明治廿八年十月廿一日	巡査部長 田村 義彦
三浦梧棲	明治廿八年十月廿一日	東京小石川区中富坂所	執行ノ手續	家宅搜索ヲ為シタル時ハ其由	勾引スルヲ能ハサル時ハ其事由	右之通取扱候也	明治廿八年十月廿一日	巡査部長 田村 義彦

勾留状

東京府東京市小石川區
中富坂町華族通職業

三浦梧棲

右謀殺及と免後聚衆ノ事件ニ付
刑事訴訟法第七十五條ノ規則ニ從ヒ廣
場拘置監入ノ留置可キ者也

但本署に於テ時ニ家宅ニ搜索可シ
明治廿八年十月廿六日午後五時迄

豫審裁判所
裁判所書記大多高文

勾留シタル被告
人ノ姓名及年齢等
三浦梧棲 男 其
事由

三浦梧棲

執行シタル
月日時
十月廿六日午後五時迄

執行シタル
場所
東京府東京市小石川區
中富坂町地方裁判所

執行ノ手續
被告ノ逮捕ニ付テハ
執行シタル

家宅搜索
其事由
勾留ノ事由
事由

右之通取扱候也

明治廿八年十月廿六日午後五時迄

止有之

秘

參一發第九四號

韓國駐劄軍司令官報告

昨夜來新情報不得

參謀總長

明治四十年九月二日

九月二日午後十二時三十五分發電
九月二日午後二時四十五分發音



秘

參一發第九五號

參謀總長

明治四十年九月三日

信原

韓國騎副軍司令官報告

九月二日午後九時五十分發電
九月五日午前零時二十五分著

步兵第十四聯隊ノ小隊大尉ノ中隊ハ八月三十一日
報恩東方三年城ニ在ル賊ヲ攻撃シ之ヲ潰亂
セシメタリ賊ノ死傷三十餘、鹵獲小銃四
彈藥若干

參一登第九大輝

明治四十年九月三日

參謀總長

韓國駐劄軍司令官報告

九月三日午前十一時四十分
九月三日午後四時 着

一 八月廿五日龍山出發忠州ト足達、下林兩支隊間連絡恢復、
為メ派遣シタル歩兵第十三旅團大隊本部及歩兵一中隊ト示
隊ハ豫定ノ行軍地ヲ經テ昨二日龍山ニ収着ス
一 元山歩兵第五十聯隊ヨリ長箭店ニ派遣シタル歩兵小隊同
地ニ上陸シタル後昨二日杆城（長箭店東南方海岸）ニ向ヒ前
進セリ等

一 大田及水原守備隊ヨリ八月廿日討伐為メ長湖院方向ニ出
タル部隊ハ各任務ヲ終リ守備地ニ帰還セリ

一 報恩南方及東方又忠州東南間慶附近ニ人若干ノ暴徒
出没スル如キモ未ダ確報ニ接セズ

參一發第九七號

明治四十年九月四日

參 謀 總 長

韓國駐劄軍司令官報告

九月三日午後九時三十分發電
同日午前零時三十分著

一 今朝京釜線小井里停車場(鳥致院北方)ハ暴徒ノ爲メ
燒毀セラル鐵道吏員ノ報ニ依レハ該暴徒全義附近ニ潛
伏シアリト依テ本日午後六時十分鳥致院發水原ニ歸還
スヘキ歩兵一小隊ヲ全義ニ下車セシメ討伐セシメントス

二 忠州大邱間ノ電線ハ本日午後五時忠州洛東間ニテ斷線シ
京城春川間ノ電線モ昨日暴徒ノ爲メニ切斷セラレ目下修
理中ナリ最ニ大破壊ヲ被リシ京城忠州間ノ電線ハ本日應
急修理ヲ終リ開通セリ

三 北青鎮衛隊及行營(會寧東方)分遣兵ハ本日ニテ解散
ヲ終ル之ニテ韓國軍隊全部ノ解散終レリ



韓國駐劄軍司令官報告(參二發第九五號ノ一部電又不明ニ付取調中ナリシヲ以テ遅延)

八月三十日我糧秣彈藥掩護隊(下古以下七名)ハ清州東北槐山附近ニ於テ約三百ノ賊ニ包圍セラレ衆寡敵セズ糧秣彈藥ハ一時賊手ニ委スルノ已ムヲ得サルニ至リシモ同夜ノ戰鬪ニテ其大部ヲ奪還セリ